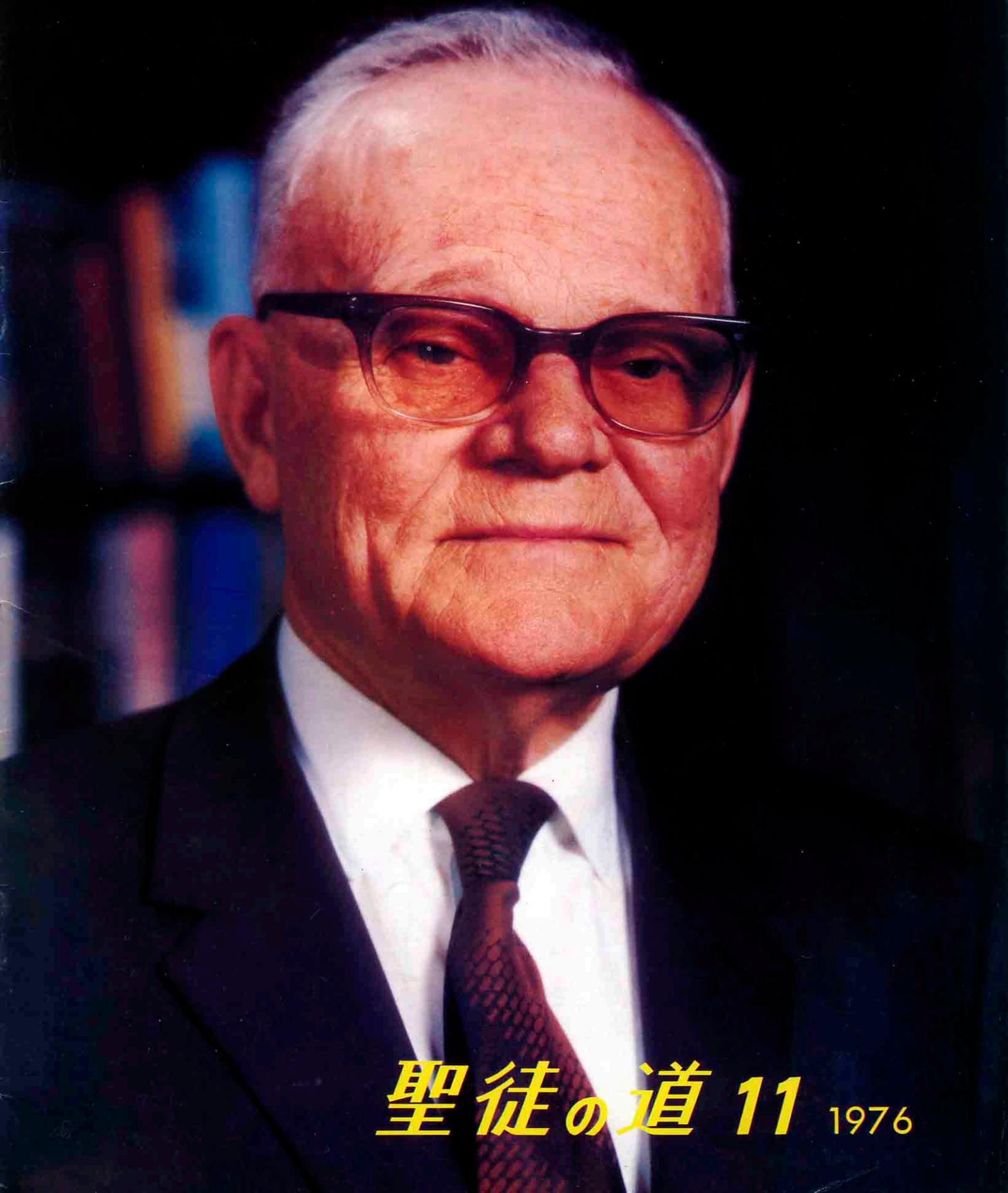


聖徒の道

1976年11月20日発行（毎月1回20日発行） 第20巻第11号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



聖徒の道 11 1976



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー

1976年 11月号

も く じ

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 デルバート・L・ステイプラー
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 ゴードン・B・ヒンクレイ
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・パッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ペリー
 デビッド・B・ヘイト

証を得る方法	マリオン・G・ロムニー	509
教会員でない夫を持つ姉妹たちへ	キャロル・O・コール	514
質疑応答		516
日々の恵み		518
理解しながら読む	ジェフリー・R・ホランド	519
しずかなほそい声	ボイド・K・パッカー	521
鍵		523
アメリカの丸太小屋		525
ハリネズミのシーリー	キャシー・S・クリステンセン	526
おもちゃばこ		528
選ばれた種族	リグランド・リチャーズ	529
純潔を心理学の立場から見て	ステイブ・ギリランド	530
決断のとき	キース・メルル	533
健康に気をつけよう、1976年健康展		536
ローカル・ニュース		538

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
 L・トム・ペリー
 ロバート・D・ヘイルズ
 O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
 キャロル・ラーセン (編集副主幹)
 ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一(日本語コーディネーター)

聖徒の道 11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5-8-10
 配 送 東京ディストリビューション・
 センター
 東京都港区南麻布5-10-25
 定 価 年間予約1,700円 1部 150円
 海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

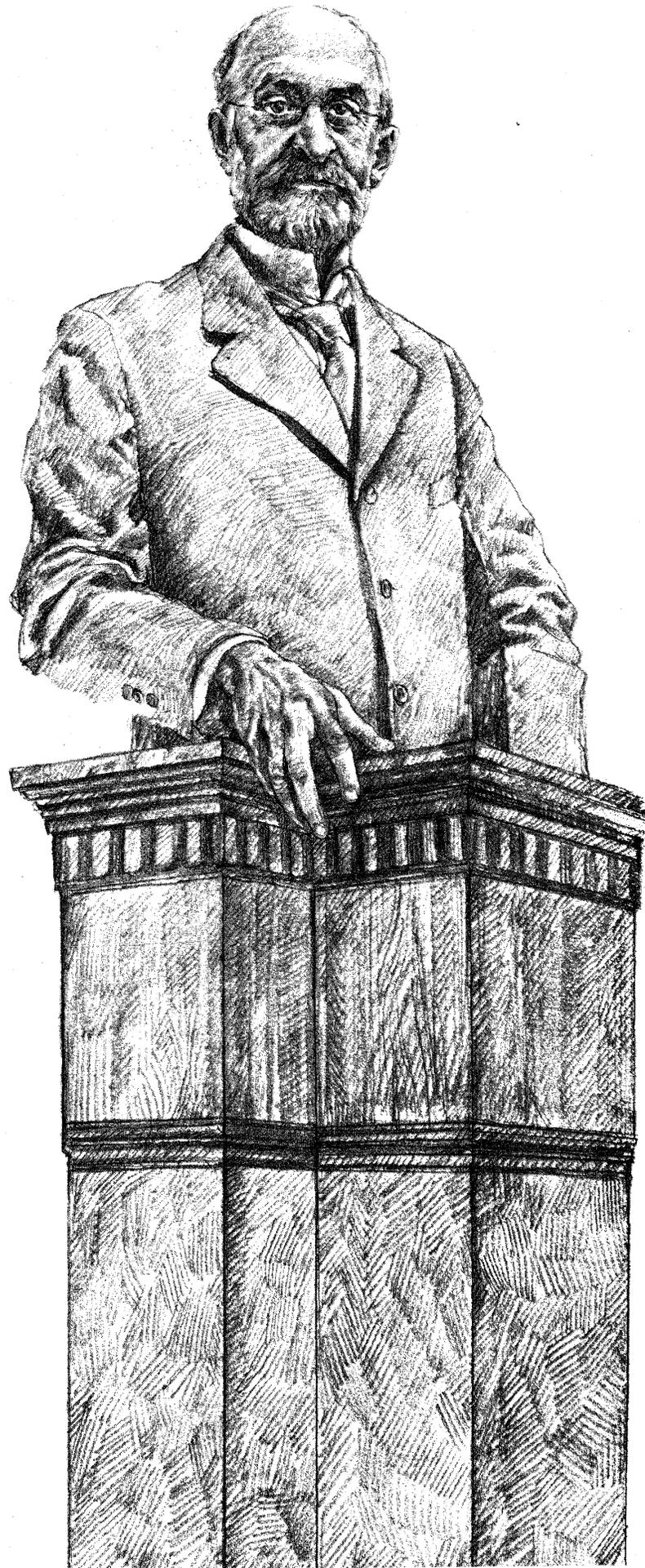
郵便振替口座番号 東京0-41512
 口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京ディストリビューション・センター

証を得る方法

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

ヒーバー・J・グラント
大管長の証を聞いたときは、
本当に胸が高鳴るのを覚え
た。「私は自分が生きている
と同じように……」



証にはいろいろな種類があり、その対象となるものも様々である。私がここで話したいのは、「イエス・キリストの福音の中に明らかにされている真理への不変の生きた確信」という意味での証についてである。そのひとつは、神が感情、感覚、肉体を持ちたもう神、すなわち予言者ジョセフ・スミスの言葉をかりれば「高められた人間」であり、また私たちの天父であるという真理に対する揺るぎない確信である。もうひとつは、イエス・キリストを中心とする神の救いの計画に対する信仰である。

さらにもうひとつこの証に必要なのは、ジョセフ・スミスの見神に対する信仰である。ジョセフ・スミスは永遠の父なる神と御子イエス・キリストにまみえ、御二方が彼の前に立って、彼に話しかけられたのである。

さらに、モルモン経が予言者ジョセフ・スミスの語ったような方法でこの世に現わされたことを事実として受け入れることである。すなわちモロナイが彼に与えた金版には古代の記録が刻まれており、予言者が神の賜と能力によって翻訳をしたということである。また、予言者ジョセフ・スミスが天の使いたちの訪れによって、日の光栄の王国に昇栄するに必要な原則と儀式と神権の権能を受けたということに対して確信を抱かなければならない。すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会が、こうした原則と儀式と神権の権能を有した教会だということである。

生ける予言者に対する証

このような証を持つ人は、神の王国の鍵が予言者ジョセフ・スミスから現在のスペンサー・W・キンボール大管長に至るまで、すべてこの教会を管理する人によって保持されてきたという真理を受け入れるのである。こうした証の中で最も重要であり、かつ最も得るのがむずかしいものは、現在の予言者がこの時満ちたる神権時代の最初の予言者ジョセフ・スミスと同じように予言者であるという証であろう。古代の予言者を受け入れるのはたやすいことであるが現在の予言者は、という人がある。イエスの時代もそうであった。主が律法学者やパリサイ人を偽善者と責められたことは、皆さんも覚えておられるだろう。死んだ予言者の墓を建て、生ける予言者を殺したからである。(マタイ23:29-34参照)

生ける予言者を信じるように主張して、予言者ジョセフ・スミスの「予言者は、予言者として行動しているときだけ予言者である」(*The History of the Church*「教会歴史」5:265)という言葉に混乱している人がある。最近、ひとりの若い女性が私に意見を求めにやって来た。彼女は、どうすれば予言者が予言者として語っていることがわかるかを知りたかったのである。それから数日たって、困惑した

若い男性がひとり訪ねて来たが、この若者は、神権を受ける資格について述べた最近の大管長会の再声明に疑問を抱いていた。

私が彼らに何を言ったかはここで改めて言うまでもない。先に述べたような証を持っている人は、決してそのような質問に惑わされないとだけ言っておこう。そのような人は、聖霊の導きのままに語られ、行なわれるすべてのことによって「事の真偽の証明」が得られることを信じているのである。(これは私の言葉ではなく、ブリガム・ヤング兄弟の語った言葉であるが)、もう一度繰り返して申し上げたい。聖霊の導きのままに語られ、行なわれるすべてのことによって「事の真偽の証明」が得られる、と。(Journal of Discourses「説教集」9:149参照)

何か疑問が生じると、福音に対して揺るぎない証を持つ人は、教義と聖約第9章の指示に造作なく従い、自分で解決する。主はオリバー・カウドリに次のように言われた。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。

されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。」(教義と聖約9:8、9)

主の導きを受けるにふさわしく十分に謙遜であれば、あなた方はこの方法によってすべての事柄を判断することができる。主の思いと一致していれば、あなた方の答えが正しいか否かを主に尋ねることができるのである。そして正しければ、主はオリバー・カウドリに約束されたようにあなたの心を内に燃やして下さるであろう。それによってあなた方は自分の答えが正しいことを知るのである。

確かな証は、人が持てるものの中で最も貴重なものである。それは人に知識と希望を与え、福音の律法と儀式に従えば約束された恵みをすべて受けることができるという確信を与えてくれるのである。

私は人が証を述べるのを聞くたびに常に感動を覚えるが、ヒーバー・J・グラント大管長の証を聞いたときは、本当に胸が高鳴るのを覚えた。グラント大管長は大会を終えるとき、いつもこう言った。「私は自分が生きておりと同じように神が生きておられ、イエスがキリストであり、生ける神の御子であり、世の贖い主であること、またジョセフ・スミスが真の生ける神の予言者であったこと、さらに、いわゆるモルモニズムがまさしく生命と救いの計画であることを知っている。」(Conference Report「大会報告」1934年10月、p.132)

私はグラント大管長のこの証を聞くたびに、強い確信を

得た。

人の学問によってではなく

証はこの世的な学問を通して得られるものではない。また哲学的な研究や証を持たない人の言葉の研究から得られるものでもない。みたまの導きを受けずに今述べたような多くの真理を説明しようとしても、行きつくところは以下に述べるようなものである。

神の本性について彼らはこう言っている。「永遠にして生ける真実の神はただひとりである。この御方は肉体もなければ感情もない。無限の力、知恵、善を持つ御方であり、見える見えないにかかわらず万物を創造された方で、この神格の中には、形、力、永遠をひとつにする三体、すなわち天父、御子、聖霊がある。」(「英国国教39箇条」より)

これと、予言者ジョセフ・スミスの言葉とを比較してみよう。「御父は、人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り。されど、聖霊は骨肉の体をもたたまわずして霊の御方なり。」(教義と聖約130:22)

では、みたまの導きを受けずに聖典を改訂しようとする人々の行きつくところが何かについて、それを示す例をここにあげてみよう。イザヤはキリストの降臨を予言してこう言っている。「見よ、おとめが身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルとなえられる。」(イザヤ7:14)イザヤが「おとめ」という言葉を使ったのは、まだ男性を知らない女性が子供を生むという意味であった。ところが現代の翻訳者は、「見よ、若い女が身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルとなえられる」と訳している。(イザヤ7:14、*Holy Bible, Revised Standard Version*, 1952年版)つまりこの英語の聖書では、*virgin* が *young woman* となっているのである。

これからわかるように、彼らはキリストを神として信じないため、「おとめ」でも「若い女」でも大差はないと思っている。

証は聖霊の力を通して私たちにもたらされる。証を持つ人は、すべて聖霊の靈感によってそれを受けているのである。予言者ジョセフ・スミスが言ったように、聖霊は神会を構成する霊の御方であり、イエスをキリストとして信じる人々に証を立てるという使命を持っている。パウロは「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とすることができない」と言っている。(Iコリント12:3、*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.223参照)

聖霊からの証

ここで何人かの方にイエスがキリストであることを知っているかと尋ねたら、多くの人が「はい」と答えるであろう。なぜだろうか。それは聖霊が皆さんに証をしたからである。この知識は、その人に突然おとずれることがある。そして、いつそのようなおとずれを受けたかということは自覚できるものである。

ここでひとりの少女の経験をお話しよう。私の妻のごとである。彼女がステーク部日曜学校管理会の一員だった頃のことである。彼女には準備会で教師に教える責任があり、そのときのレッスンは、予言者が神と御子にまみえたことに関するものであった。そのクラスには末日聖徒ではないアイダホ大学の卒業生がよく顔を出していた。もちろん福音を信じてはいなかった。彼女の心に、この教養ある洗練された卒業生は、予言者ジョセフ・スミスに天父と御子が現われたという話など受け入れられないのでは、という気持ち起きた。そう考えるとひどく不安になってきた。自分でも真実なのかどうか分からないのである。彼女は心を悩ませ、母親に泣きながらこう言った。「お母さん、私レッスンできないわ。ジョセフ・スミスが本当に示現を受けたかどうか分からないの。あの人は笑って私を軽べつするにちがいないわ。」

彼女の母親は別に学識があるわけではなかったが、証は持っていた。彼女は娘に言った。「予言者がどのようにして示現を受けたか知っているでしょう。」

「ええ」娘は答えた。「知恵を受けられるように祈ったわ。」

「じゃ、そのようにしたら。」母親はそう言った。

娘は自分の部屋に行って試してみた。イノスのように一心不乱に神に祈ったのである。そうして彼女は確信に満ちたレッスンを行ない、普段の能力以上の力を発揮できたのであった。どうしてそのようにできたのであろうか。それは、聖霊が降って彼女の疑問に答えてくれたからである。彼女は心の内に燃えるものを感じた。ジョセフ・スミスが示現を受けたことをはっきり知ったのである。予言者が見たものと同じものを見たわけではなかったが、同じ知識を得た。彼女はジョセフ・スミスの言葉から、彼が見たものを知り、ジョセフの言葉が真実であるという証を聖霊を通して受けたのである。

証によって生じる変化

時々、証は長い間かかって与えられることがある。私は自分自身の経験では、証が突然もたらされたという記憶がない。また証が全くなかったということもない。私の証は日々強められてきているのである。証は、突然もたらされても、段階を踏んでもたらされても、その人に何かを生じ

させる。証を受けると、受ける前とは異なった人物となるのである。善良な人間、偉大な人間は異なっている。ペテロはそうであった。イエスが十字架におかかりになると言われたとき、ペテロは共に死にますと言った。それに答えて、イエスはペテロに言われた。「にわとりが二度鳴く前に、……三度わたしを知らないと言うだろう。」(マルコ14:30)

キリストが引き連れて行かれるとき、ペテロも後から離れてついて行き、キリストが告発される場所まで行った。聖書にはその様子がこう記されている。「ある女中が、彼……を見、彼を見つめて、『この人もイエスと一緒にいました』と言った。

ペテロはそれを打ち消して、『わたしはその人を知らない』と言った。

しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、『あなたもあの仲間のひとりだ』。するとペテロは言った、『いや、それはちがう』。

約一時間たってから、またほかの者が言い張った、『たしかにこの人もイエスと一緒にだった。この人もガリラヤ人なのだから』。

ペテロは言った、『あなたの言っていることは、わたしにわからない』。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。

主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主のお言葉を思い出した。

そして外へ出て、激しく泣いた。(ルカ22:56-62)

しかしペテロは後にどうなったであろうか。ペンテコステの日、聖霊がペテロをはじめ使徒たちに降り注ぎ、彼らは証を得た。そしてペテロとヨハネは神殿に行き、足なえをいやした。イエスのみ名により神権の力を行使したため、神は願いを聞き届けられて、その男をいやされた。人々は彼のまわりに集まり、奇跡に驚き怪しんだ。ユダヤの指導者たちは自分の部下を取られてしまうのを恐れ、彼らを監禁し、キリストのみ名によって教えるはならないと命じた。これらの統治者は、キリストを十字架にかけて殺したように、このふたりも殺すことができた。しかし、ペテロは今までのペテロではなかった。統治者たちがペテロとヨハネにそう命じたとき、ペテロは次のように答えたのである。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。」(使徒4:19、20)

ペテロには証があったのである。

アルマとパウロの経験も、証が人を変える良い例である。

神の前に立ち、肉体を得ていたときの行ないを裁かれるときに、人はこのことを知るであろう。しかし私は今その知識を得ている。

私の父は、証を持った人と持つ前の人とは、ちょうど生きて成長しつつある木と、枯れてしまった木の切株にたとえられるといつも私に話してくれた。私は確かにそうであると思う。

証はどのようにして得るのだろうか。私はイエスが、これに対して最も素晴らしい答えを与えて下さっていると思う。仮庵の祭のとき、イエスは神殿の中で教えを説いておられた。イエスを殺そうと計っていたユダヤ人たちはイエスの教えに驚嘆し、「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろうか」と言った。イエスはこう答えられた。「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされた方の教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7:15-17) この声明は「愚かなる者」の「迷い入る」ことのない道をはっきりと示している。(イザヤ35:8)

証を得る方法

証を得るための第一の方法は、明らかに天父のみこころを知ることである。これは主のみ言葉を学び、学んだ言葉に従うことによって得られる。聖典を研究しなさい。予言者の教えを研究しなさい。モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、聖書を研究しなさい。近代の予言者の教えと予言者ジョセフ・スミスの生涯を読みなさい。神のみこころを知り、従いなさい。

証に近道はない。道はただひとつ、ふたつはないのである。その確実な道を、主は次のように教えておられる。「オリヴァ・カウドリよ。誠にまことにわれ汝に告ぐ。…汝ある知識を受くべしと信じて信仰をもて真心より求むる如何なる事の知識をも、これを得んことは汝の神にして



汝の贖い主なる主の今生きて在るが如く正に確なり。

然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖靈によりて汝の智と情に告げんとす。

そもそも、見よ、これは啓示の『みたま』なり。」（教義と聖約8：1-3）

自分が学んだ福音に関する事柄について確信を得たいと心から望む人は、すべて、主がオリバーに言われたように、聖靈によってその「智と情」に告げられる。そして主が言われたように、この証は「心の中に留る」のである。さらに以下の事柄を行なえば、証は永遠のものとなる。すなわち、罪を悔い改め、バプテスマを受け、按手礼により聖靈の賜を受け、この世での生活が終りを告げるまで、福音の原則に従うことである。

私はこれまで述べてきたことがすべて真実であることを心から証申し上げる。私は神が生きてまい、イエス・キリストが生きておられることを知っている。神の前に立ち、肉体を得ていたときの行ないを裁かれるときに、人はこのことを知るであろう。しかし私は今その知識を得ている。この真理を私に証するのは聖靈である。神は祈りを聞いて下さる。私にはそれについての経験が数多くある。私は主から直接の啓示を受けた。私には自分の力では解決できない問題があった。なかなか解決のめどがたたず、それを解決せずには一歩も前に進めないという状況におかれたこともあった。しかし祈りと断食を通して、私は解決策が心にはっきりした形で啓示されるのを経験してきた。私は主のみ声を聞いた。私は主のみ言葉を知っている。

兄弟姉妹の皆さん。あなた方すべてが神の祝福を受けて、この福音の真理に対して証する偉大な賜を得られるように。予言者ジョセフ・スミスは、人は無知にしては救われまいと言った。（教義と聖約131：6 参照）予言者の言う無知とは、外国語を知らないから救われまいとか、ある科学の分野に無知だから救われまいとかいうことではない。私は、学ぶということには全く異論はない。学問は善いものである。できるだけ学問を修めていただきたい。それぞれ特別な分野に、さらに知識を深められる分野に進んでいただきたい。すべては大切である。しかしながら、これらのどれをとってみても、予言者が人は無知にして救われまいと言ったその知識を与えてくれるものはないのである。

救われるための知識は、イエス・キリストの福音が、その教える原則をも含めてすべて真実であるとの証に伴ってもたらされるものであり、得られるのである。私は皆さんがそれを得ておられることを知っている。神の祝福があって、あなた方すべてが証を得、人生の終りまで変わらず忠実であられるように。なぜなら、そのような人にこそすべての約束が与えられているからである。

教会員でない夫を持つ 姉妹たちへ

キャロル・オズボーン・コール



愛する姉妹

私にはあなたの立場がわかります。私も長い間あなたのお仲間、心の中で助けを願ったあの気持は、あなたと同じだと思うからです。私も数々の集会に出ながら、も

しや夫を改宗させる手がかりがこの話にないか、この考えにないか、この啓示にないかと、願いをこめて耳を傾けてきました。その手がかりがそばにあったことに気づかなかったのです。でも今は、その手がかりを鍵に扉をあけ、夫は扉をくぐりました。それでも私には、まだその鍵を捜している姉妹たちのことが忘れられません。あなたがその鍵を見つけられるようにお手伝いをしたいと、心から思っています。

私たちのワード部でもそうですが、教会員以外の人と結婚している姉妹は大勢います。そこにまず第一のとても重要な現実があります。夫は教会員にならないかもしれないということをしっかり認識して下さい。統計を見れば、教会に入らない人の方が多いのです。忘れてはならないのは、その選択が自分にかかっていることです。教会員にならないと言って夫を責めれば、夫は私たちに失望を感じるでしょう。夫への不満はたとえ口に出さなくても感じてわかり、私たちの苦勞がだいなしになります。私たちは夫のありのままを愛するのであって、こうなれば愛するというような条件つきのものではありません。夫を教会に連れて行くことに夢中になって、家庭を管理してもらう幸せをすっかり忘れてしまうことがなきにしもあらずです。1971年の扶助協会大会で、十二使徒のボイド・K・パッカー長老がこうおっしゃいました。「男性の自我、男性の本質に触れるこのような微妙な感情がある。あまりにもしつこく夫を教会に誘いすぎて、教会という場でも夫に指導してもらおうようにすることを忘れてしまう女性が少なくないということを、私は率直に申し上げなければなりません。」（「聖徒の道」1972年7月号、p. 300）

この大会でのパッカー長老の忠告は、15年間の教会生活の間に読んだものの内で、私のような者の立場に対する一

番の力となり慰めとなった言葉です。まだ読んだことがなければ、どうぞ図書館から借りて、できればコピーをして何度も読んで下さい。

もうひとつの自覚は、ほぼ偶然に得られたものです。ユースコンファレンスのときのことでした。私はYWPIAの会長兼付添い人として、これもユースコンファレンスの経験のひとつというほとんど眠られない二晩を過ごし、くたびれ果てて帰宅しました。土曜の午後に帰ったのですが、家には仕事がたくさんたまっていたため、日曜の朝になっても疲れが抜けず、つい寝過ぎてしまいました。早朝に開かれる母と娘の会に責任があって、それにどうにか間に合う時刻でしたが、夫のジムと子供たちの朝食は作る余裕がありませんでした。私が家を出るとき彼は怒っていました。そして、帰ったときもまだ怒っていました。けわしい言葉のやりとりがあって、予定していたあと3つの集会への出席は不可能に思われました。私は集会に出られないことと、ジムに言われたわけではないのですが、教会の全部の活動をお断わりするつもりであることを監督に話そうと決意しました。

私は泣きながら日曜学校に行って、監督を捜しました。監督は私を一目見るなり、問題があることを知りました。私はわけを話そうとしたのですが、驚いたことに、監督はそのことがわかっていた様子でした。後でわかったことですが、彼は前の晩に、私が解任を頼みにくる夢を見たそうです。監督は私を監督宅に呼んでこのように祝福して下さいました。「コール姉妹、あなたがなすべきことをすべてなしたら、御主人はきっとバプテスマを受けます。約束します。」私はその言葉に慰められましたが、それでもジムはどうかしらと心配しながら帰宅しました。私はまず妻として、次にYWPIAの会長として自分の悪かったことをあやまってから仲直りをし、ジムの許可をもらってその日に予定していたことを無事すませました。

その祝福について考えたとき、大切なのは、監督が「帰ってからジムにこうしてほしいと言いなさい」とか「ジムにこうしなければだめだと言いなさい」とは言われなかった点だと悟りました。監督がおっしゃったことは、私がすべきだということでした。福音に従うこと、万事それに尽きるのです。

その祝福でもうひとつ思い出したのは、前にある姉妹が話して下さいました。彼女は、御主人がもし教会に入らなかったとしても、それは自分が福音を守らなかったせいではないかとおっしゃっていました。彼女は御主人がバプテスマを受けるのを14年間も待っていました。当時まだ結婚生活2年目だった私は、その長さに内心恐れたものでした。でも結局私も彼女と同じ位待って、ジムがバプテスマを受けたのは結婚後13年半のときでした。

振り返ってみると、私はいろいろな助けを受けたと思います。子供たちや友人や、それにももちろん、ふさわしいときには聖霊から助けをいただきました。私にはジムの進歩がはっきりわかりました。ジムは自分が考えていることや、

行なっていることを決して口に出して言わない人ですが、私にはジムの進歩の理由がわかるのです。そして、何か探究するようとか、自分で考えたり人に質問したりするようとか、陰からジムの役に立つことを言うように促される感じがしました。世間ではそれを直感と言うのですが、それが何か、私たちはもっとよく知っています。そうでしょう？

ではこれまでに話した2点をまとめて、そのほかのこともお話ししたいと思います。

教会員でない人との結婚を選ぶときは、その責任がすべて自分に降りかかってくることを自覚して下さい。そして夫が自分の望んでいる通りの男性であるということを知らせ、感じてもらって下さい。

自分の霊性を高めるように努力して下さい。「規則に規則を加え、誠命にいましめを加えれば」（教義と聖約98：12）、福音に対する理解や愛が増し、霊性が高まります。そうすることによって家族全員に影響が及びます。

自衛にやつきにならないで下さい。私たちはだれでも疑問を持つときがあると思いますし、求道者（自分ではそうと認めない人も含めて）は、自分が聞いたり読んだり考えたりしていた反モルモン的な考え方を一通り言ってみるのが普通です。ジムの考え方を知るように努めて、賛成できる場所では賛成し、できない場所では穏やかに不賛成の気持を示す方が、討論したり感情的になるよりもずっとよい結果を得ました。教会は真実です。真実は攻撃に屈しません。

他の教会員とのいさかいを家庭に持ち込まないで下さい。このことは特に新婚時代の人に言えることです。福音に対する信仰や教会という土台がないと、つまらない口論が人の態度を硬化させます。まして求道者はなおさらです。

子供の音楽の教師に讃美歌を教えるように頼んで下さい。奇異に感じられるかもしれませんが、これは私が思いついて行なってみて、とても役立ったことです。娘のローリーはピアノを習っていましたが、弾けるようになってから、教会の讃美歌を練習曲に使うよう先生にお願いしました。毎日家中に讃美歌が響いて、一般の讃美歌曲には悪口を言うので通っていたジムが、間もなくひげをそるときや庭仕事の間によく讃美歌を口ずさむようになりました。私は大喜びしました。パッカー長老がお話の中で、「夫が教会に行くことを面倒くさいと感じるとき、あなたは、彼に家にいながら教会にいるように感じさせることを行ないなさい」（「聖徒の道」1972年7月号、p. 300）と勧めていらっしやうた通りになったからです。

教会の社交活動ができるだけ利用して下さい。ジムが教会でかたくならずにすんだひとつの方法は、ワード部の会員と親しくなって、教会の集会に行ったときに気楽にいられたことでした。

もちろんそれだけではありません。あなたがぜひ、楽しみながら熱心にそのような活動に参加して、夫が仕事上の目的や旧友との交わりのために参加しなければと思うよう

にすることが大切です。あなたにとってはあまり出たいと思わない集会かもしれませんが、夫を助けることが大切です。

夫を家長として重んじ、夫を尊敬していることを行ないによって子供たちに示して下さい。

家庭の夕べを行なって下さい。ジムは初めテキストを使うことに反対しました。定期的に家族の時間を持つことは大体賛成なのですが、おしきせの必要はないというのです。それで彼の考えに沿ってスタートしました。できそうな年齢の子供を入れて家族みんなが、ジムの言う方法で順番に会を受け持ちました。（私は自分の番のときには必ずテキストを使うようにしました。）その結果テキストの良さがわかって、今では毎回使っています。

教会で聞いてきた特別な証や信仰を強くする話などを教えてあげて下さい。夫にとっては理解しがたい話かもしれませんが、一つ一つの話や証は夫の成長に役立つことでしょう。「どうも信じられない」とか「わからないなあ」とか言われても、とりつくりわらないで下さい。信じられないようなことがあるものだ、彼に同意することです。

聖徒の道を予約して下さい。夫が本好きでなかったら、印象的な箇所をときどき読んで聞かせてあげて下さい。子供が小さかったら、読んであげるのにちょうどよい話が載っています。十代の子供なら読んだ記事や考え方について自然に会話が出てくるでしょう。

いつ話すか、いつ黙っているか、何を言うか、どのように言うかなど、聖霊の導きや促しに頼って下さい。聖霊は、あなたが教会員に確認されたときに受けた賜です。それはあなたの一生で受ける一番大切な賜とすることができます。祈りをもっと賢明に使って下さい。そうすれば報いはきっと大きいでしょう。私は自分の経験からそのことが言えます。

私の場合、夫とできる限りよい関係を築いて、福音に完全に従うことが秘訣でした。非教会員との結婚で確実に保証されるものは何もありませんが、それだからといって良いものを締め出すことはありません。

私たち夫婦に役立ったことがあなたのお役に立つように願い、また成功するようにと祈ります。御主人はどうしても教会に入らないかもしれませんが、どうかがかかりしないで下さい。これまで述べてきた原則に従うことであなたの家庭にもたらされる今以上の喜びや幸せが、それ自体報いなのですから。

心からの愛をこめて、
福音に結ばれたあなたの姉妹より

（キャロル・オズボーン・コール 主婦、モンタナ・ビュートステーク部ビュート西ワード部扶助協会母親教育教師および若い女性会長）

日々の恵み

私を待っている夫

メリル・C・リップトロット

夫を交通事故で失ってから、何の希望も見出せないにもかかわらずまだ生きていられたなどとは、全くもって信じられません。私たち夫婦は心から愛し合っていました。お互いのため、子供のために生きてきたのに、その計画も夢もすべてが水泡に帰してしまいました。6歳を頭に3人の子供を残して夫に先立たれてしまったのです。しかもその6ヵ月後、4人目の子供が生まれたのでした。私は無神論者でした。毎日が逃れられない悪夢の連続でした。

夫のダニーが亡くなって3日後、私は夢ではっきりと彼を見ました。降りしきる雨の中、にぎやかな通りを縫って歩きながら、ダニーは悲しげな様子で、「ぼくは死んでいない。まだ生きてるんだ」と言うのです。私の喜びを想像して下さい。でも、目がさめて夢だとわかったとき、私はまた深い絶望に襲われました。

夫の死後数ヵ月間、私はいろいろな宗教の牧師や宣教師を訪れては慰めを求め続けました。牧師たちは、神がいて死後の世界もあると説きましたが、だれも、私がまた夫のそばに行けると言うては下さりませんでした。ある人々は、私が無神論者であることに拒否反応を示しました。私は気をまぎらわすために日に80本もたばこを吸い、紅茶やコーヒーやアルコールは絶えませんでした。1年半が過ぎても、まだ私は茫然自失の孤独な状態でした。

1973年5月のうららかな午後のことです。ふたりの若いモルモン宣教師が、ドアをノックしました。私は信仰を押しつける宣教師がきらいでしたが、彼らは好ましく、とても幸せそうに見えました。その晩、彼らは「幸福の探求」の映画を見せて下さいました。私は、こんなことが信じられたらいいですね、特に死んだ人が霊界で愛する人たちに迎えられるという場面など、と彼らに話しました。長老たちはその教えは真実であると強い証を述べて、私もレッスンを続けてお祈りすれば自分で真実なことがわかるとおっしゃいました。私はどうかと思ったのですが、とりあえずまたモルモン経の話をしに来るといふのを承知しました。

でも彼らが来る2日前、話はもう聞かないようにしようと自分に言い聞かせ、来たら居留守をしようと思心に決めました。ところが彼らは1時間早く来て、私に不意打ちをかけました。彼らはリーハイのことを短くレッスンしてモルモン経を置いて行き、私はそれを読むことを約束しました。読書は大好きだったので、読むのはたいして苦労ではありませんでした。私は第一ニューファイを全部読みました。

日曜日がやってきました。教会に行くのは気が進まなかったのですが、子供たちは行ったことがないというので日曜学校に行くのをとても喜びました。それで家族で出かけ

ました。その日の家族の霊的な発表が死者のための儀式というテーマで、私はとても信じられませんでした。日曜学校のレッスンはブリガム・ヤングと一夫多妻のことについてでした。それが終わると、私は車の中で一服し、もう決して来ないようにしようと思いました。

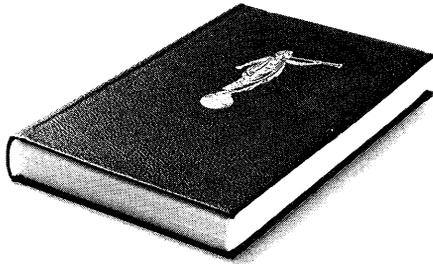
でもその晩、子供たちがベッドに入ってから、私はジョセフ・スミスのパンフレットをもう一度読んでみました。そのとき、「どうして彼はこんな話を作り上げたのかしら」と不思議に思いました。それからモルモン経を取り上げて第二ニューファイを読み出すと、やめられなくなりました。天父に祈って、本当に死後の世界があるかどうか尋ねてみようと思いついたのは、真夜中を過ぎた頃でした。そのことをとても知りたいと思いました。その夜夢の中で、私はまた夫を見ました。このときは真っ白な服を着て、太陽が輝き、木と花に包まれた美しい緑の野原に立っていました。彼はまた自分は生きていますと言いました。そして死後の世界もあると言いました。私は驚きました。

翌晩はモルモン経を260ページ読み、それから、それは真実ですかと天父に祈って尋ねました。翌朝は早く目がさめました。部屋中が輝くように見え、何か暖かくて幸せな感じがして、私は聖霊に満たされ、頭の先からつま先までまるで燃えるようでした。第二ニューファイの聖句が頭に浮かんできました。ヨセフと父の名にちなんでジョセフと名づけられる聖見者のことが書いてある聖句です(IIニューファイ3:14、15)。私はもう一度その聖句を読み、それから祈ったときに、ジョセフ・スミスは神の予言者で、モルモン経は真実であることを知りました。私はとてもうれしくなり、外に駆け出して宣教師を見つけ、この良い知らせを伝えたいと思いました。

その晩宣教師は私に知恵の言葉について教えて下さいましたが、すっかり身につけてしまった習慣なのでとてもやめられないと思いました。彼らからレッスンを学びながらも、1本また1本と始終タバコを吸っていたのです。でも彼らは確信をもって私にできると言い、一緒に祈って下さいました。そして私のタバコを持って帰りました。私はその日から一度もタバコを吸いたいとは思ったことはありません。本当に、主は祈りに答えて下さいます。

私は、あの素晴らしいふたりの青年がわが家のドアをノックしてからちょうど17日目に、バプテスマを受けました。そのときから、自分のしたことの正しさを一度も疑ったことがありません。私は祝福師の祝福を受け、その祝福と約束に心を躍らせました。神殿で夫と結び固められ、子供たちをふたりに結び固めましたが、私にはダニーがその儀式を受け入れて、福音の中で毎日進歩しながら私たちを待っているという証があります。

救い主はこうおっしゃいました。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。……わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:28、30)これが本当であることを私は知っています。私は絶望の淵にいました。けれども今、もし自分が福音に忠実であるなら、幸福の頂に登れることを知っています。主が私の希望を取り戻して下さいましたからです。



理解しながら読む

ジェフリー・R・ホランド



編集部より：編集部では9月号に、ホランド兄弟の「聖典を生きたものに」という題の記事を掲載した。それは質問をすることによってモルモン経の読み方を父親が娘に教える、という内容であった。この続篇では、モルモン経に何度も現われる主題を一部取り上げている。また、モルモン経を読みながら自問すべき項目を提案している。大きな主題を見定め、なぜモルモン経が現在私たちの手もとにあるような内容で記載されているかを考えることによって、モルモン経の理解を大いに深め、よく味わうことができるようになるであろう。

啓示の概念が第1章に非常に明確に示されているので、ニーファイ第一書のほとんどの項にも啓示が記されているのを、ただ当然のこのように感じる。2章は「主は夢の中で父に仰せになった」という言葉で始まっており、

2節ではさらに強く「主は命じたもうた」となっている。16、19節ではその範囲が広がり、ニーファイも含まれている。「主は……私を訪れたまい」「私に語られた」

その後の章でもさらに啓示が与えられている。リーハイは息子ニーファイに言った。「私は一つの夢を見た。その夢の中で主は汝と汝の兄弟たちがエルサレムに帰るよう私に命じられた。」(Iニーファイ3:2) この命令を守るに当たって兄弟たちが困難に遭遇していたとき、「一人の主の使がきて二人の前に立ち、……二人に仰せになった。」(Iニーファイ3:29) ひとりでエルサレムの町に入ったニーファイは、「みたまに導かれて」進んだ。そして大きな困難に直面したとき、「強くみたまに動かされた」と記録されている(Iニーファイ4:6、10)。こうして、ひとりの男が殺された結果、ニ

ーファイは目的の品物、すなわち神の啓示の記録を手に入れることができた。ニーファイと読者は、この厳粛な事件を通して、聖典の絶対的な必要性、人の生死に影響を及ぼすほどの必要性を教えられたのである。この聖典がなければ、民全体が不信仰に陥り、滅んでいたであろう。

数々の夢、予言、記録、神の声、示現、み使いの訪れ、みたまのささやきというように、節を追うごとに啓示の上に啓示が積みあげられて、最初の5章が終わる。まじめな読者ならだれでも、この初めの数10ページを読んで、神からの導きを受ける人間の能力について基本的な事柄を把握しようと努力するに違いない。モルモン経ではこの命題が力強くまっ先に出ている。天父が地上の子らの諸事を導かれるということ信じようとしなない人には、モルモン経はもうそれ以上何も告げるものを持たない。しかし、読者がさらに読み進む用意があるなら、これまでに記録された啓示の中でも最も荘厳な啓示を読むであろう。その中にはリーハイが見た生命の木の示現(この木に首尾よく到達するには神の言葉に着実に従わなければならない)や、ニーファイが見たキリストの誕生から世の終りに至るさまざまな出来事の驚くべき示現が含まれる。ニーファイ第一書の末尾でエホバは、イザヤの口を通して次のように問いかけている。「およそ母であって自分の生んだ子を憐まないほどその乳児を忘れることができるであろうか。たとえかれらが忘れようとも、イスラエルの家よ、われは必ず汝らを忘れない。見よ、われはわが掌に汝らを彫り刻んだ。」(Iニーファイ21:15、16) モルモン経はその存在と内容の双方において、エホバが私たちを決して忘れたまわらないことを教えている。これらの章を通じて、啓示が与えられる過程における私たちの役割についても繰り返し教えられていることに注目すべきである。リーハイの最初の祈りからニーファイの後の熟慮に至るまで、私たちは啓示を受ける方法について、今所有している聖典の中でも最も詳しい記述に接することができる。例えば11-15章でニーファイは、絶えず主のみたまかみ使いから「見よ」と命じられている。みたまに「見よ」と促され、

ニーファイは父が示現で見たのと同じ表象を見た。みたまの「見よ」と言う指示に従って、彼は諸々の表象の意味を知った。「見よ」と言うみたまの叫びで、ニーファイは一国民の行く末と世界の終りを見た。みたまは6頁ばかりの紙面の中で12回近く「見よ」と命じている。この短い命令の言葉は、私たちがこの書の残りの部分を読んでいく上で、重要な意味を持つのではないだろうか。天使は私たちに「見よ」と語りかけているのではないだろうか。

「目を使ってあなたの身と霊を救え。神の啓示を読みなさい。あなたの理解の眼を開いて、霊夢、示現、予言、みたまのささやきの世界を見なさい。」聖典を読まないこと以上に危険なことがある。それは、読みたくないという態度である。イエスは、目はあるが見ようとしない人々のことを嘆いて泣かれた。

モルモン経の冒頭のこれらの章では、ほかにも何かがあるように思われる。それは、ひとつの書の中の章が互いに関連し合っているだけでなく、諸々の書が互いに関連し合って統一をなしているということである。また、ニーファイ第一書では、二者の対抗や二者択一の例が繰返し出てくるのがわかる。ニーファイがある型の息子であればレーマンは異なった型の息子であり、リーハイがある型の指導者であるとすればレーマンは他の型の指導者である、等々。二者対抗の例の中には次のようなものがあげられる。

ニーファイ、	}	_____	{	レーマン、
サム				レミュエル
リーハイ	_____			レーマン
新エルサレム	_____			古代のバビロン
生命の木	_____			地獄の淵
キリストの母	_____		{	不義の源である
				淫婦
神の小羊の教会	_____			悪魔の教会

もちろん究極の対立は、キリスト対サタンである。

このサタンは最後には征服され、「長年の間」縛られる。(Iニーファイ22:26)。ニーファイは現世の荒野に横たわるそのような諸々の選択あるいは二者択一の道を、祈りをもって苦勞しながら進んでいったのであった。ニ

ーファイと彼に従う少数の忠実な人々は、良い業をしようとするときには必ず反対の勢力が妨害することに気づいていたようである。

「すべての物事には反対のものがある。」これは聞き慣れた言葉である。ニーファイ第二書には、「すべての物事には反対のものがある」という力強い説教が記されている。この説教は、アダムの墮落、キリストの贖い、それに私たちにふたつの方向で影響を与える自由意志の本質的な問題を生き生きと述べている。(IIニーファイ2:11参照)

リーハイはニーファイの第二書ではなく、第一書のどこかで、反対のものの存在や自由意志について力強い説教(または族長の祝福)をすることもできたであろう。しかし、90ページ近い紙面に出ている様々な対立や二者択一の例に接した後に聞いた方が、リーハイの息子にとっても読者にとっても、効果は大きいのである。この小さな一団の中でも信仰あるわずかな人々は、あらゆるものに反対があることを経験して耐えていた。しかもそれらを通して彼らは、自分自身のことや、墮落した世界、神の計画、自由意志の行使について学んだのである。またメシヤが来られることや、メシヤが時の初めから世の終りまであらゆる反対勢力に耐えられることについて、また地獄の重苦しい鎖から解放されることを望む人に「自由と永遠の生命」を与えたもうことについて多くのことを学んだ。

こうしてみると、ニーファイ第一書のすべての苦難は、私たちがニーファイ第二書と、第二書を貫くキリストの像に向かわせるものであるように思われる。第二書の33章は、メシヤに関するイザヤの予言と、メシヤの神性を証する末日の証人、言いかえればモルモン経の出現に前後して起こるいろいろな出来事についてのイザヤの予言を頻繁に引きながら、私たちの現世の旅路でキリストが果たされる役割を証言している。ニーファイ第二書は、将来の人々に対するニーファイの最後の証である壮重な「キリストの教え」の説教で終わっている。ニーファイの死後、代わってヤコブが、私たちがキリストから引き離す諸々の罪やその他、高慢、富、性道徳の退廃、さらにはシェルム

のような反キリストの直接的な影響に対して警戒するように警告した。第二書はこのようにして続いていく。さらに読んでいくと次のような質問が心に浮かんでくる。

なぜ「敬虔」に見せかけた独善的なゾーラム人のことを書いたアルマ31章が、モルモン経の中でも最も不義な反キリスト者コラホルを扱ったアルマ30章に続くのだろうか。この2章のいずれか、あるいは両方は、信仰についてのあの傑作とも言うべき教え、アルマ32章と何か関係があるのだろうか。なぜゼノスの引用であるという未知の説教を載せた一風変わったアルマ書33章が、32、34章というふたつの傑作の間に挿入されているのだろうか。これもふたつの章を結びつける傑作なのであるだろうか。これらの章(アルマ書30章から34章まで)は、アルマ書35章の「厳しい言葉」および36章から42章にわたってアルマが息子たちに極めて親しく語りかけている部分と関係があるのだろうか。

またニーファイ第三書11章はモルモン経の「山上の垂訓」(IIIニーファイ12、13、14章)にどのような貢献をしているだろうか。「岩の上に基を置く」ことは説教全体にどのような意味を与えているだろうか。聖餐についての教え(IIIニーファイ18章)はなぜキリストが幼な子たちと過ごされたことを記したIIIニーファイ17章のあとに続いているだろうか。また、聖霊が是非とも必要であること(IIIニーファイ19章)は、前の章と関連があるのだろうか。

モルモン経は、豊かな意味を持つ言葉と救いの教義、それに長い予言が、宝石のようにちりばめられてできた書物である。書名が変わるごとに内容が吟味され、凝縮されて、「地上にある書物の中で最も正確な書物」、すなわちイエスがキリストであって他に道はないというただひとつのことを伝える書物となっていくのである。モルモン経はあらゆる標準に照らしてみても、偉大な書であり、珠玉であり、書物中の書物である。その内容は神の言葉であり、私たちの宗教のかなめ石である。私たちはのどのかわいた子供のようにこの書物の泉から絶えず飲まなければならないのである。



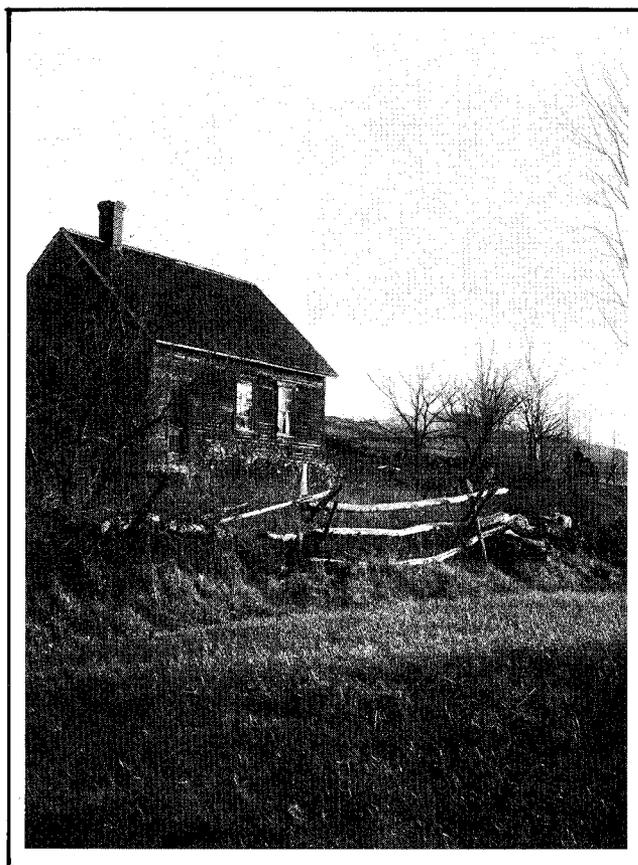
小さな お友だちへ



わたしは、お母さんからとても大切なことを、学びました。お母さんは、まつじつせいとにとって、とても大切なことを、おしえてくれました。

けっこんして間もないころ、わたしのお父さんとお母さんは、小さなうじょうにすんでいました。土地がやせていて、作もつがあまりできなかつたので、とてもまずしいらしをしていました。

ある朝のこと、お父さんは、はたけをたがやすどうぐをこわしてしまいました。町のかじやさんに行かないと、なおすことができません。そこで、家ぞくみんなで町へ行くことにしました。町まではとおかつたので、めったに行きませんでした。お母さんは、町ですることをあれこれ考えながら、子どもたちにしたくをさせました。ちょうど、1しゅう間分のせんたくをしていたところだったので、ストーブでゆをわかしていましたが、火をほそくして、自分もでかけるよういをしました。お父さんは馬に車をつなぎ、門のところでみんなをまっていました。お母さんは、子どもたちをだき



しずかなほそい声

ボイド・K・パッカー

(ストックホルムちいきそう大会でのお話)

あげて馬車にのせ、自分ものろうとしました。そのとき、お母さんはちょっとためらいました。行かないほうがよいような気がしたのです。

「お父さん、きょうは行かないことにしますよ」とお母さんはいいました。

「どうしたんだい。」

「わからないんですけど、行かないほうがよいように感じるんです。」

お父さんは、ただこういいました。

「そう感じるのなら、行かないほうがいいな。」

お母さんは、子どもたちを馬車からおろし、自分もおりました。お父さんはひとりで、馬をかりたてて、かい道へ出て行きました。子どもたちはざんねんで、しかたがありませんでした。見おくりながら、なき出してしまう子もいました。でも、お母さんは心の中で、いいました。『何かわからないけれど、これはきっとなにかあるわ。』

しばらくたったときです。こげくさいにおいがしはじめました。天じょうからつき出していたえんとつから、火のこがやねうらのほこりにもえ

うつって、天じょうがもえはじめたのです。わたしたちは、バケツリレーをして、火をけしとめました。

みなさん、なぜわたしのお母さんは、町へ行かなかったのでしょうか。

わたしのお父さんとお母さんは、いつも、わたしたち家ぞくをしゅくふくしてくださるように、たべものやきるものがあたえられますようにと、いのっていました。のうじょうをかうためのちょい金もしていました。そして、そのお金は家の中にしまってありました。もしそれがもえてしまっていたら、大へんなことになっていました。おいのりは、ちゃんときかれていたのです。

では、もう一ど。なぜ、わたしのお母さんは町へ行かなかったのでしょうか。「エマ、きょうは町へ行かないほうがよい」という声を耳で聞いたわけではありません。また、「エマへ、きょうは家にのこっていなさい」という手紙をうけたわけでもありません。ただ、そう感じたので家にのこったのです。しずかな、ほそい声を心で聞いたのです。お母さんは、お父さんにいいました。「行かないほうがよいように、感じるんです」。このことは、わたしにとって、とても大切なけいけんでした。

みなさん、みなさんもどうぞ、みたまの声に耳をすまして、せいかつしてください。

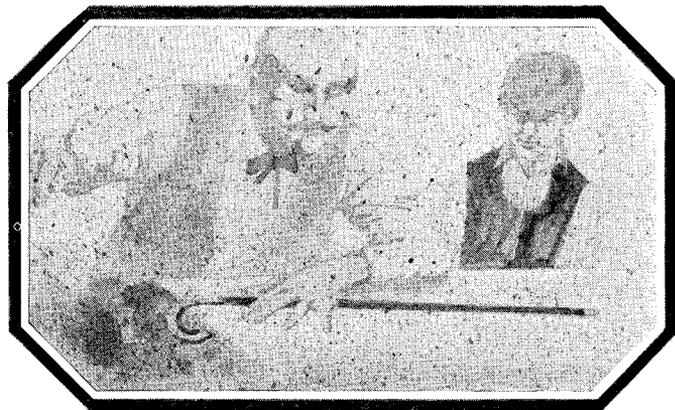
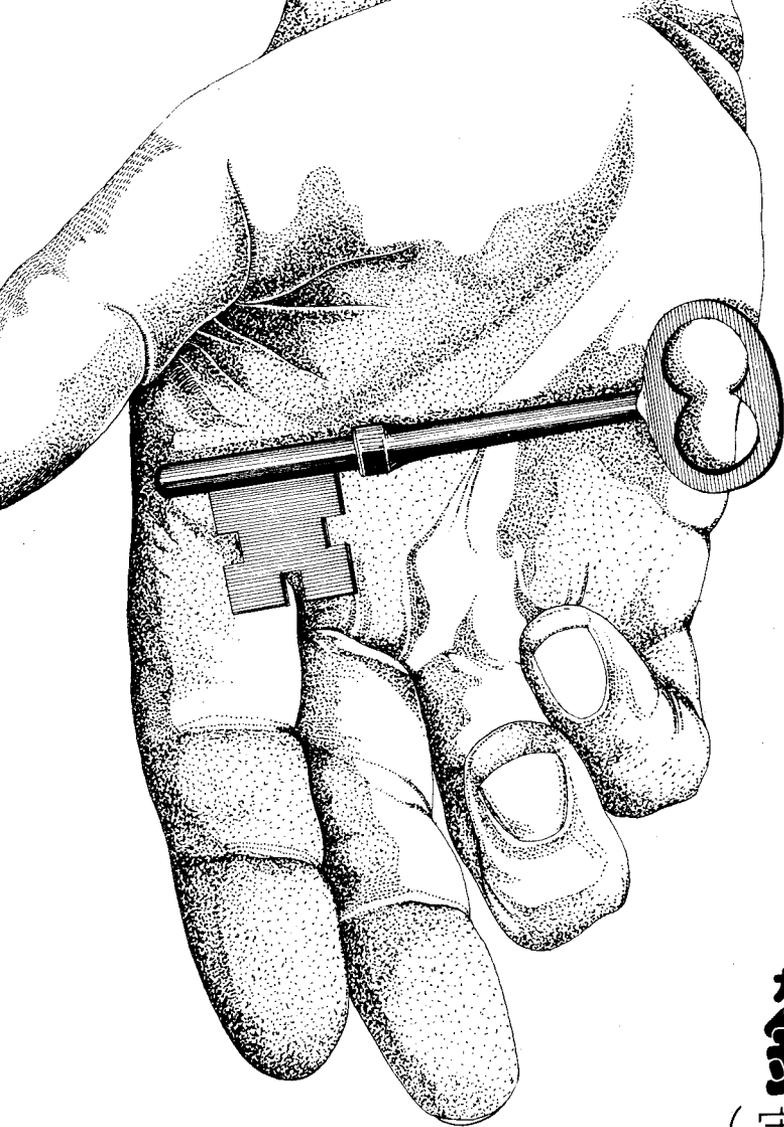


クリスチャンはポケットの中の鍵をいじりながら、ろう屋へと歩いて行った。何ヵ月も勉強し、祈り、とうとうこの鍵をある大切な目的のために使うことにしたのだった。クリスチャンは、いつもこの鍵でろう屋のとびらを開け、しゅう人たちの食物を中へ入れてやっていた。

しゅう人たちのほとんどは、モルモンの宣教師だった。宣教師たちは大てい、シオンの獅子という名のパイロットボートでフレデリックスタッド港に入港し、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなどをふくむスカンジナビア伝道部の海岸地方を伝道して歩いた。

初めのうち、クリスチャンは宣教師たちに大して注意を向けなかった。彼はルーテル教会の準会員で、正会員になるために、牧師との公開問答にそなえてひっそりで勉強しているところだったからである。彼は、モルモンの宣教師たちが、フレデリックスタッドにとう着すると、すぐにたいほされるといふ事実には、ほとんど無関心だった。

ルーテル派はノルウェーの国教であり、それ以外の教えをの



かぎ 鍵 (実話)

べ伝えるものは、そくぎに捕えられ、ある場合は数週間、またある場合は何ヵ月もろう屋に入れられた。そして、法ていにひき出され、そのしゅう教をすて、ノルウェーの国教にしたがうことをちかうように、強せいされた。そしてそれをこばむと、またろうやへもどされたのである。

ろう番はクリスチャンに、しゅう人たちに食事をはこぶとき、できるかぎりのいやがらせを言い、不しんせつなたいどをとるように言った。それはおもしろいことであったが、ある日、若い宣教師のことばを聞いて以来、

おもしろいどころではなくなった。宣教師は、こう言ったのである。「なぜ、そんなことをなさるんです。まるで、聖書の時代にキリストやその弟子たちをはくがいした人たちのようですね。」

クリスチャンは、はっとしてどういう意味かたずねた。ふたりの長老が福音について話してくれ、モルモン経をかしてくれた。

毎晩クリスチャンは、公開問答の準備の勉強をするときに、モルモン経を研究し、聖書とてらし合わせ、ルーテル派の教え

とくらべてみた。だんだんに回復された福音が真実であることがわかりはじめ、どうしたらよいかを知ろうと思って、祈った。しかし、答えをえられぬままに公開問答の日をむかえ、わざと落第し、6ヵ月後にまた公開問答を受けることにした。

数ヵ月のあいだに勉強したことや祈ったことを考えていると、何をしなければならぬかがわかった。そして、とうとう、このかぎ鍵を使うことにしたのである。クリスチャンはふたりの宣教師をろうやから出して、近くのフィヨルドへ行き、バプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として確認を受けた。儀式がすむと3人はろうやへもどり、宣教師たちはそれぞれの室へ行き、クリスチャンは、またかぎ鍵をかけた。ノルウェー各地でモルモンがどれほどはくがいされているか、それに、このことを父親が知ったらどんなにおこるだろうかと考えて、クリスチャンはこのスリルにみちた出来事を、だれにも話さなかった。1852年、冬の夜の出来事だった。これを厳格な父親に理解してもらおうとしてもだめだということは、わかって

いた。母親には話そうと思った。しかし、母親も耳をかしてはくれなかつたらう。そうこうするうちに、次の公開問答の日がやって来た。クリスチャンは、かねて志願していたとおり、他の準教会員たちとともに、公開問答の場に立った。

牧師は、まずこう質問した。

「神を信じますか。」

「はい。」クリスチャンはそう答えた。

次の質問はこうだった。

「神はどのような御方ですか。」

「神は肉体と感情を持ちたまう御方です。そして、かぎりなく高きみくらに、座したまい、善なる御方であり、思いやりを持ちたまひ、私たちを見守り、願いを聞き、その祈りに答えたまいます。私たちは、神と御子イエス・キリストの形ににせてつくられました。」

牧師はこの答えに、ぎょうてんしてしまつた。しかし公開問答はつづいた。クリスチャンの答えは、ますます牧師をぎょうてんさせるばかりだった。父親の方に目をやると、父親はすっかりとりみだしてつた。ついに牧師は、かんかんになつてつた。「君は、まるでモルモンのようなだ。」

「はい、ぼくはモルモンです。ぼくは、モルモンであることをほこりに思つています。」クリスチャンは答えた。

これを聞くと、父親は席を立ち、つえではげしくゆかをたたきながら、通路から外へとび出してつた。母親もどうしたらよいかわからず、その後をおつ

た。

クリスチャンは、両親と話し合おうと思つて、家へ急いだ。しかし、何と言つたらよいかわからなかつた。その晩、いつものようにたきぎをうでいっばいかかえて家に入り、だんろのそばにおいた。そこへ父親がやって来た。父親は、はじをかかせてくれた息子を一目見るなり、つえをふり上げて彼を打ちたたいた。そしてしばらく後、息を切らせながら、つえをテーブルの上にはうり投げた。

「お父さん。」クリスチャンはつた。「福音のために打たれるのなら、うれしいくらいです。」

それを聞くと父親はたけりくるつて、たきぎを、雨あられとクリスチャンめがけて投げつた。そして、投げつけるたきぎがなくなつてしまつと、ドアを開けてわめいた。

「出て行け、二度とその顔を見たくない。」

クリスチャンは、体中きずだらけになりながら、なやにかけこんで、ほし草の上に身を投げた。

その夜おそく、父親がねむつてしまつと、母親がそつと食物とクリスチャンの持物を、はこんできてくれた。母親は、なみだながらに、できるかぎりの、きずの手当てをしてくれた。

「なぜ……どうしてこんなことをしてくれたの。」うちひしがれながら、とりすがるようにこうたずねた。

「こうしなければならなかつたんです。」クリスチャンは答えた。「ぼくは勉強して、祈つ

て、これは真実の教会だということがわかりました。母さんには話そうとしたんです。でも、きつと聞いてくれなかつたでしょう。自分の知っていることを否定することはできないんです。もしそうしたら、ぼくたちの救い主であるイエス・キリストを否定することになるんです。できないんです。」

「お前が言うように、それが正しいと思うのなら、しっかりとその道を歩むよりほかはないねえ。でも私は、とてもつらくて……」

空が白みはじめると、母親はそつと家へもどつてつた。クリスチャンは、母親が持つて来てくれた小さな包みを持つて街道へ歩いてつた。生まれ育つた家を通りすぎながら、深く息を吸つて、両親に別れを告げた。二度と会うことはない、感じてつた。

クリスチャン・ハンス・モンソンは、どこへ行けばよいのか、何をしたらよいのか、知らなかつた。

「証がある。」14歳の少年はこう心の中でさげんた。「何が起ころうと、ぼくはこれを否定しない。証がある。何もかも。これでいいんだ。」



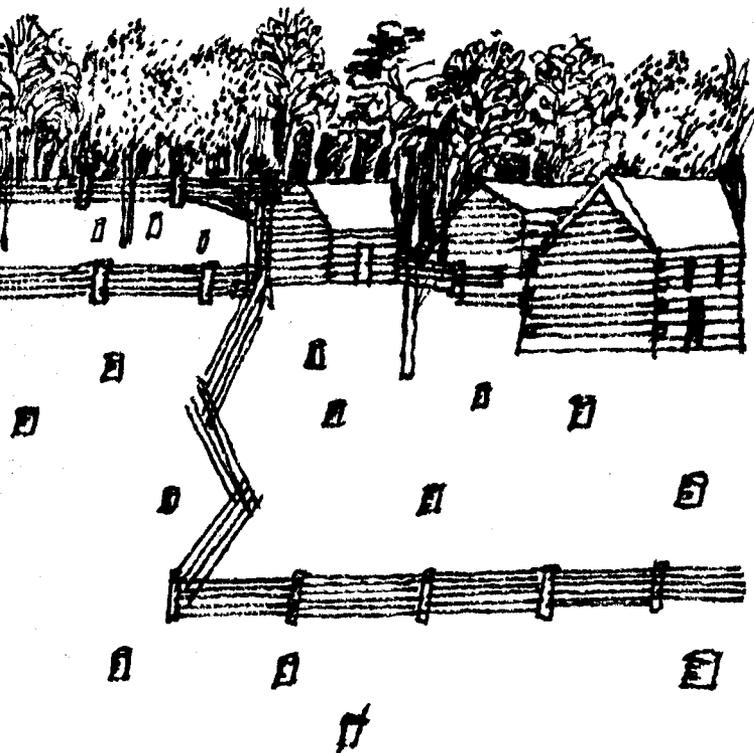


1852年3月12日、フォレスト・モナーク号が、ミシシッピー河の河口につきました。その中に、ジョン・E・フォースグレン長老がのっていました。長老は、スウェーデンへ行き、スウェーデンのせいとたちに、ジョセフ・スミスのことや、ブリガム・ヤングのことについて、そして、やがて西部にたてられるシオンについて話し、せいとたちをアメリカにつれて来たのです。

でんどうはとても大へんでした。あたらしい、しゅうきょうをおしえたために、ろうやへ入れられたりしました。また、かい

アメリカの丸太小屋

オリブ・W・バート



しゅうした人たちも、友だちや、きんじょの人たちから、はくがいされました。その上、アメリカへ行くたびのとちゅうで、とてもきけんな目にあいました。しかし、フォレスト・モナーク号は、とうとうアメリカについたのです。

しかし、そこからユタまでのたびも、大へんでした。スウェーデンのせいとたちがユタについたのは9月ですから、6ヵ月もあれのをたびしたことになります。

スウェーデンのせいとたちは、ブリガムシティーにすみつき、そこに丸太小屋をたてました。ひとりで、あまりじかんをかけずに、作ることができました。どうぐはナイフとおのだけでした。木と木をくみ合わせて作るので、クギはつかいません。中はあたたかく、木のかべがあついで、インディアンの矢も、てっぽうのたまも、とおしませんでした。

また、はたけをたがやしたり、牛やニワトリをかったりもしました。家具づくりもしました。ひつじの毛やカイコの糸をつむいで、おりものもおりました。

ユタしゅうには、今でも、スウェーデンのせいとたちがたてた、丸太小屋があります。



ハリネズミの シーリー

おはなし：

キャシー・S・クリステンセン

え：

チャールズ・キルター

ある春の日のこと、フィンランドの町にあるヘンリクスン家のうらにわで、お母さんハリネズミが、4つごの赤ちゃんを生まれました。かわいいぼうやばかりです。でも1ぴきだけ、いたずらっこがいました。シーリーです。

夏がきて、秋がきました。

お母さんハリネズミは、いそがしそうに、子どもたちのせわをしています。子どもたちはみんな、お母さんのいうことをよくきいて、おなかがいっぱいになると、小さなボールみたいにまるまって、おひるねをしました。でも、シーリーだけはべつでした。

「おひるねなんか、大きらい。あそんでいるほうが、おもしろいや」

アリの巣をほりちらかしたり

くさった木のきりかぶに、はなをつっこんだり、ちょちょこごきまわっていました。

フィンランドの秋はみじかくて、冬がかけ足でやってきます。冬になると、ハリネズミはとうみんしなければなりません。お母さんハリネズミも、子どもたちも、あなほりに大いそがしで

す。でも、1ぴきたりません。そうです。シーリーです。

「どうみんなて、つまんない。1日中とんぼがえりをしたり、あそんだりしたいなあ」シーリーはイチゴばたけを走りまわりながら、心の中でいいました。

あそびつかれたころ、空から





雪がまいおりはじめました。ひらり、ひらり、まっ白な花びらのように、地めんにおちました。空がくらくらになって、さむくなってきました。

「さむいなあ、それにつかれちゃった。少しねむってから、お家にかえろう。」

シーリーは、くると小さな

ボールのようにうずくまりました。

そこへ、ヘンリクスン家の子どもたちがやってきました。子どもたちは、シーリーを手のひらにのせて、家に入って行きました。シーリーは、ぐっすりねむっていました。

「ねえ、お母さん、にわでハ

リネズミを見つけたんだ。家の中で、かってもいい？」

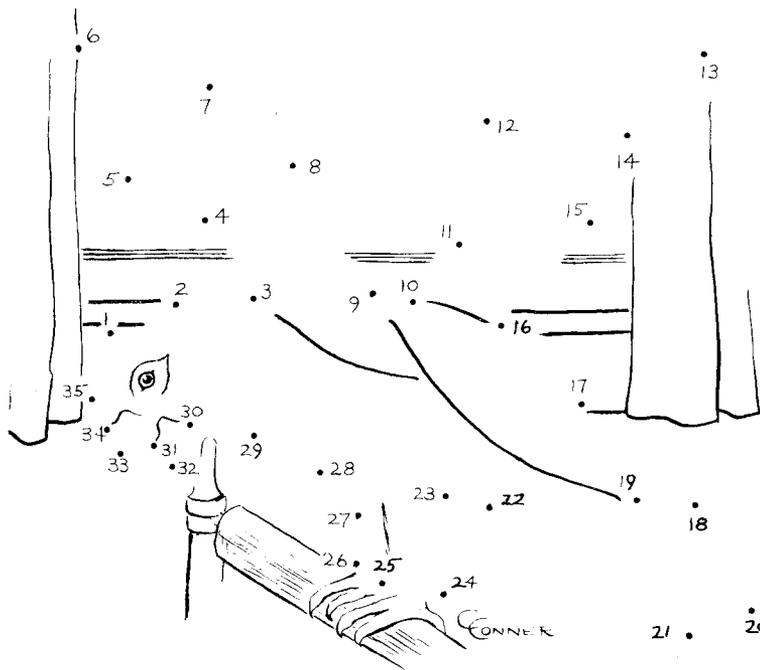
お母さんはいいました。「ハリネズミにはきっと、おにわにお家があるのよ。そして、お母さんや、お父さんがいるのよ。そこへかえしてあげたほうがいいわ。」

子どもたちは、少しがっかりしたようすでした。でも、すぐに家から出てきて、シーリーをイチゴばたけにおきました。そして、お家に入って、まどからシーリーを見ていました。

お母さんハリネズミが、ねむっているシーリーを見つけました。そして、おこさないように、あなの中へつれて行きました。

そして、ねむっているシーリーに、そとこういいました。

「さあ、とうみんよ。あそびたいでしょうけれど、今はしかたがないの。あそんでいたら、こごえしんでしまうわ。」



おもちゃばこ

てんをおすんでみましょう

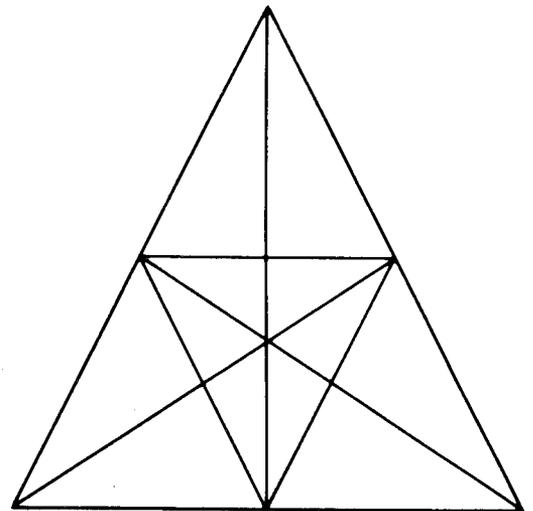
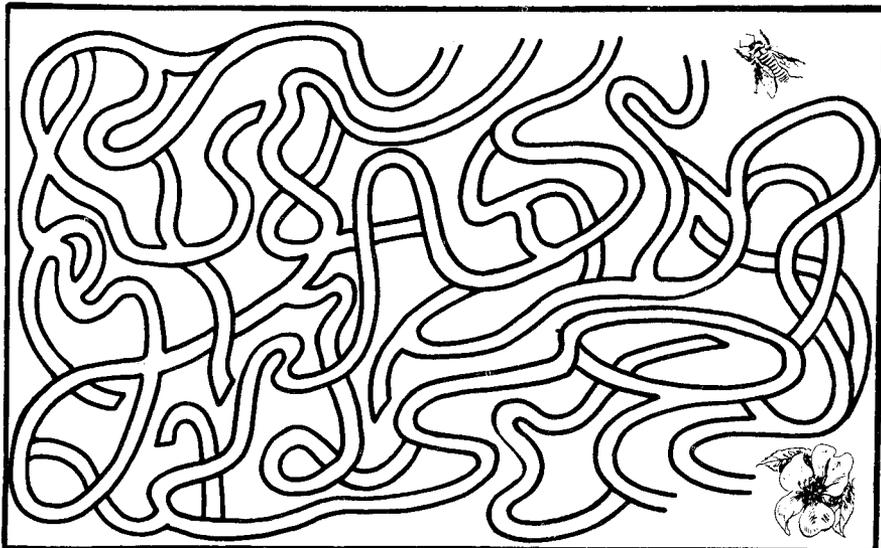
キャロル・コナー

なにができるかな

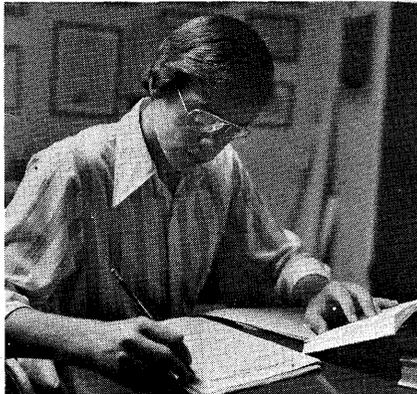
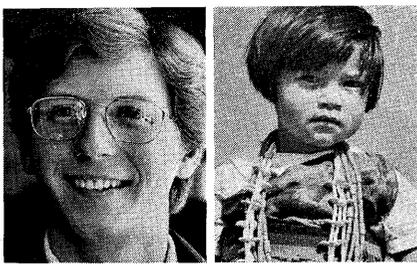


キャロル・コナー

ハチさんが、みちにまよってしまいました。どのみちをいけば、おはなのところまでいけるかな。



3かくけいは、ぜんぶでいくつありますか。



大いなる責任

もし幕が開かれて、主が高貴で偉大な霊たちの中に立たれたときのあなた自身を見ることができるとしたら、あなたは主の次のような声を聞かろう。「これらの者をわが統治者となさん。…アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり」(アブラハム3:23)

私が祝福師の祝福を受けたのは、わずか8歳のときであった。その祝福文に次のようにある。「あなたはこの地上に偶然に誕生したのではありません。全能の神のみこころに従って、大いなる業を成就するためにやってきたのです。」祝福文にはその後、私にできることが詳しく記されている。少年の頃、私はいつも、偶然にこの地上に生まれたのでないのなら、主がみ業を遂行する特権を私から取り上げないで下さいと祈った。現世を終えて帰るとき、主から「リグランドよ。これがお前になすよう命じたことだ。しかしお前はそれを果たさなかった。お前は遠回りをしたので、私たちはお前の代りにほかの人を選ばなければならなかったのだ」と言われるほどがっかりすることはないだろう。

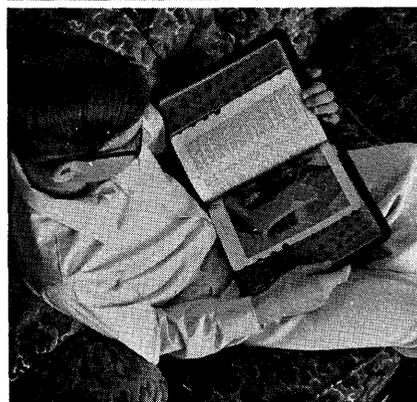
幕が開かれて、そのときのあなたを見ることができるとしたら、あなたの行く手に待っていること、すなわち、この日この時にこの地上に生を受けた高貴で偉大なあなたに主が何を望んでおられたかを思い出し、それを示現に見ることができたならば、あなたの方の中に時間を無駄に使うと思う人はひとりもいなくなるだろう。必ずや神に誉れとみ栄えを帰し、神の子らに恵みを与えるために授けられた賜と才能を使いたいと望むことであろう。

才能をどのように使うか

皆さんはタラントのたとえ話を覚え

選ばれた種族

十二使徒評議員会会員
リグランド・リチャーズ



ておいでであろう。主人が長い旅に出ることになった。そこで彼は僕たちを呼んで、「ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラント」を分け与えた。しばらくしてから主人が帰って来て、僕たちと計算を始めた。五タラントを渡されていた者は、ほかに五タラントもうけていた。主人はその僕に言った。「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」

二タラントの者も一私たちもこの僕と同じように全部を渡されているわけではない—ほかに二タラントをもうけ、同じ答えを主人から受けた。ところが、一タラントを渡されていた者は次のように言ったのである。「ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行ってあなたのタラントを地の中に隠しておきました。」そこで、主人は僕からタラントを取り上げて、言った。「そのタラントを……十タラント持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。」そして主人は「役に立たない僕を外の暗い所」に追い出した。「彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」(マタイ25:14-30参照)

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王国の神権者、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」(欽定訳Iペテロ2:9)

純潔を心理学の立場 から見て

スチーブ・ギリランド

「愛し合っていて結婚するつもりふたりが、性関係を持ってどうして悪いのですか」と、私はよく聞かれます。

末日聖徒は、主がこのことについてどう言われたかを知っています。婚前交渉は「主の目から見て憎むべき行い」（アルマ39：5）であり、徳ある人こそが「自ら信ずること神の前に強くなる」（教義と聖約121：45）のです。

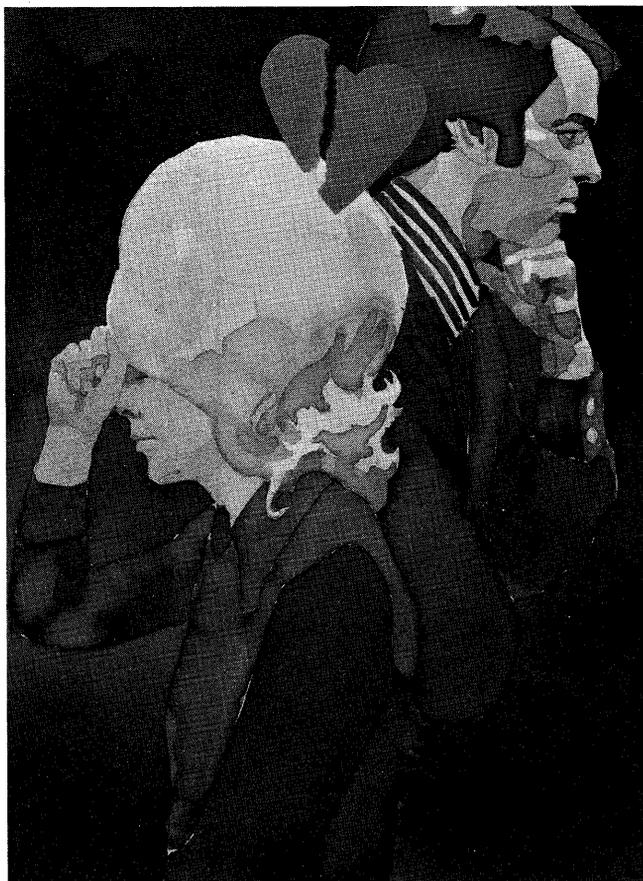
主は何が私たちが幸せにするかを知っておられるので、こうしなさい、こうしてはいけないと戒めを与えられます。

スペンサー・W・キンボール大管長はこう言われました。

「主は戒めに従わない人に応報する怒れる無慈悲な神であるとする読者がいるかも知れない……神が自分の子供たちに罰を与えたり、子供たちが苦しんだり、痛みを味わったり、悲嘆に暮れるのを望んだりするとは考えられない。……しかし、人は……罪の結果から逃れることはできない。……ときには罰が下るのが遅い場合もあるだろうが、しかし、いずれ罰が下ることは私たちが生きているのと同じように明らかなことである。」（「救しの奇跡」pp.150-51）結婚まで性関係を慎まなければならないということに対する心理面での理由を、主はとりたてて詳しくは述べておられません。私はカウンセラーという職業柄、その経験から、また心理学の面から、婚前は純潔でいることが賢明だということを確認をますます深くしていることを、青少年の皆さんにはっきり言うことができます。

まず第一に、性経験はただ肉体の欲求を満たすだけではありません。私たち全人格に複雑に関係しています。予言者たちは、それを正しく用いるなら生殖は私たちを高め、清めるものとなるが、悪用すれば私たちの良心は踏みにじられると教えています。

キンボール大管長は次のように言っています。「未婚者が肉欲に屈伏するとき……彼らは肉体の君臨を許し、霊を鎖に縛ったのである。これを愛と呼べようとは、とうてい考えられない。」（*Faith Precedes the Miracle* 「奇跡に先駆ける信仰」 p.154）私は長年カウンセリングに携わってきて、それが本当だということを知りました。婚前交渉を結ぶと、相手を永遠の価値を持った存在として見るよりも、自分勝手な欲望の対象として見てしまうのです。そうになると、人が物のように考えられてきて、人間関係はうまく行きません。



幸せな結婚生活を築くには時間と努力が必要です。恋人同士が意見の衝突を何とかしなければならぬとき、性関係で結びついている人たちにとっては、問題や相違に直面するよりも肉体関係に逃げ込む方がずっと簡単です。そのようにして、お互いにもっと深く知り合うことがいつまでもできなくなるのです。

それにまた、肉体関係に頼る人たちは結婚生活のそういう面ばかりを過大視しがちです。肉体関係はもちろん大切ですが、ほかにも大切なことはたくさんあるのです。目がひとつのことばかりに行くと、ほかのことは見えなかつたりうわの空だつたりして、永遠の関係を築くのがむずかしくなります。

婚前交渉のもうひとつの危険は、それをきっかけに結婚に対する障害が次々と出てくるということです。

まず来るのが罪です。性交渉の後どんな気持になるか、だれでも初めからわかっているわけではありません。その人はたぶん自尊心が薄れ、ふたりの関係に罪悪感を覚えるでしょう。避妊をしていても望まない妊娠をすることはしょっちゅうあります。自分の子を墮胎によって葬る親の苦しみは、だれにもわかりません。

2番目にやっかいなのは疑惑で、結婚に悪影響を及ぼす心配があります。「自分を1個の人間として愛しているのかしら、それとも遊び相手としか考えていないのかしら」というふうです。その原因は心理的であると同時に非常に霊的な面を持っています。愛は神からの賜ですから、無私の心とか犠牲とかの霊的な賜がいろいろ付随しています。

もし私たちが愛情を間違った方法で表現したなら、聖霊は私たちから離れ、その結果不安やいらだちや利己心が起きてきて、自分と天父やほかの人たちや本当の自己との関係が損われます。婚前交渉から生じるこのような状態が、何よりも結婚をだめにするのです。

婚前交渉をしていて「私たちは結婚しますよ。お互い浮気は絶対しません」と言うカップルがいるかもしれませんが。でもエベリン・M・デュバルは「結婚まで待つのはなぜ」(Why Wait Till Marriage)という本の中で、婚前交渉をした人たちはそうでない人たちよりも婚約破棄が多いこと、純潔で結婚を迎えたカップルが最も幸せな結婚生活を送っていることを統計で示しています。性関係を持って、婚約を破棄されて感じる幻滅と恐れはどんなに深く大きなことでしょう。主は婚約者同士の間でもそのような行為を禁じられました。

恋人たちは、「待っていてマイナスなのは何だろう」と考えてごらん下さい。セックスはどうしても満足させなければならぬ欲求ではないのです。フリーセックスの支持者でさえ、「どうしても性関係を持たなければだめだと考えてやってるわけじゃないと思います」と言っています。(Sexual Behavior「性行動」1971年6月号、p.51)性交渉がなくても立派な生活をしている人は大勢います。性関係を慎むことで気違いになることはありませんが、個人の尊厳を交渉によって損って感情のバランスを失うことはよくあります。またそれと反対に、心理的な問題があって性関係に逃避するということもあります。社会学者たちは、自己評価の高い人たちよりも無力感を持った人たちの方が婚前の性経験を持ちたがることを発見しています。(『性と相互関係』、The Individual, Sex, and Society『個人、性、社会』より、pp.19-27)

ある人たちは、自分は特に純潔を守るのがむずかしいと言います。でも自分をごまかさなさい。だれだって苦勞して自制心を養っているのです。なるほどある人々は戒めに従い、誘惑を避け、努力して主のみたまと近い生活をして、その苦勞を少なくしています。でもそれだからといって、彼らが強い衝動と闘っていないわけではないのです。

マッケイ大管長はその欲求を「天与のもの」と呼んで、こう強調して言いました。「あなた方は肉体的な欲求が現われる年頃である。しかしそれとちょうど同じ時期に神が理性と分別の力を与えられたこと、それらが神聖な目的が~~あ~~ってのことであることを決して忘れてはならない。理性と分別を道しるべに、あなた方のはかりとしなさい。」(Improvement Era「インプルーブメント・エラ」1959年2月号、p.78)

こう言う人がいます。「でも不感症や不能に悩む人たちがいますよ。結婚前から一緒にいたら、そんなことがなか

ったんじゃないですか。」率直に言って、当面している問題よりもその「解決」なるものがもっと悪い結果を残すことがあります。私はこのような問題を持った大勢の人たちとカウンセリングをしてきました。たいていの人はそういう問題があっても、お互いに愛しあっていて幸せだと感じています。専門的な援助も取り合ってくれないときには、その人たちの問題はセックスの不満ではなく、愛や結婚生活の心がけの足りなさですと申し上げています。

性的不能を結婚生活の一番の問題のように話すのは間違いです。夫婦の間にそうした問題が生じるのは、感情的、霊的なものに原因があるのであって、セックスの問題はその単なる徴候にすぎないのです。

大切なのはお互いに主に対して誠実なことです。良い人間関係は信頼に基づくものですが、信頼は誠実に基づいています。私たちは決意しなければ、長い時間をかけて愛情を深めていくことはできません。

結婚の決心をする前は、人がどう言おうと不安を感じることでしょう。でも結婚のときには、たとえ何が起ころうとも決して離れないと、ふたりで誓うのです。

待つことで失うものはありません。得ることばかりです。自制しながらふたりの関係を高めていくとき、結婚がはるかに美しく意義深く充実したものであることを知るに違いありません。

恋人たちが一瞬の情熱に流されてしまったとき、すべてが失われるのでしょうか。そうではありません。赦しは与えられます。C・S・ルイスは教えています。「悪の道を選ぶ人がみな滅びるとは思わない。正しい道にたち帰ることに彼らの救いがあると思う。悪いことはすべて正すことはできる。しかしそれには、たち戻って誤ちを見出し、その時点で新たな努力を始めなければならない。ただ進むだけでは決して正すことはできないのである。」(The Great Divorce「増えている離婚」p.6)

悔改めはたち返る道です。キンボール大管長は言っています。「時々、罪の意識が重く心にのしかかって来ることがある。悔改めようとしている人は……『主は私を赦して下さいさるだろうか』……という疑問に駆られることがある。しかし、罪を犯した人が深く失望し、絶望のどん底に達し、自分の無力にあえぎながらもただ信仰を抱いて神の慈悲を抱いて祈ると、静かで、細く、それでいて全身を刺し貫くような声が聞こえてくる。「子よ、あなたの罪はゆるされた。」(「赦しの奇跡」p.354)

(ギリランド兄弟はマサチューセッツ・ボストンステークス部大学支部の支部長であり、ハーバード大学のケンブリッジインスティテュートの指導主事でもある。4児の父でカウンセリングの博士号を持つ。)

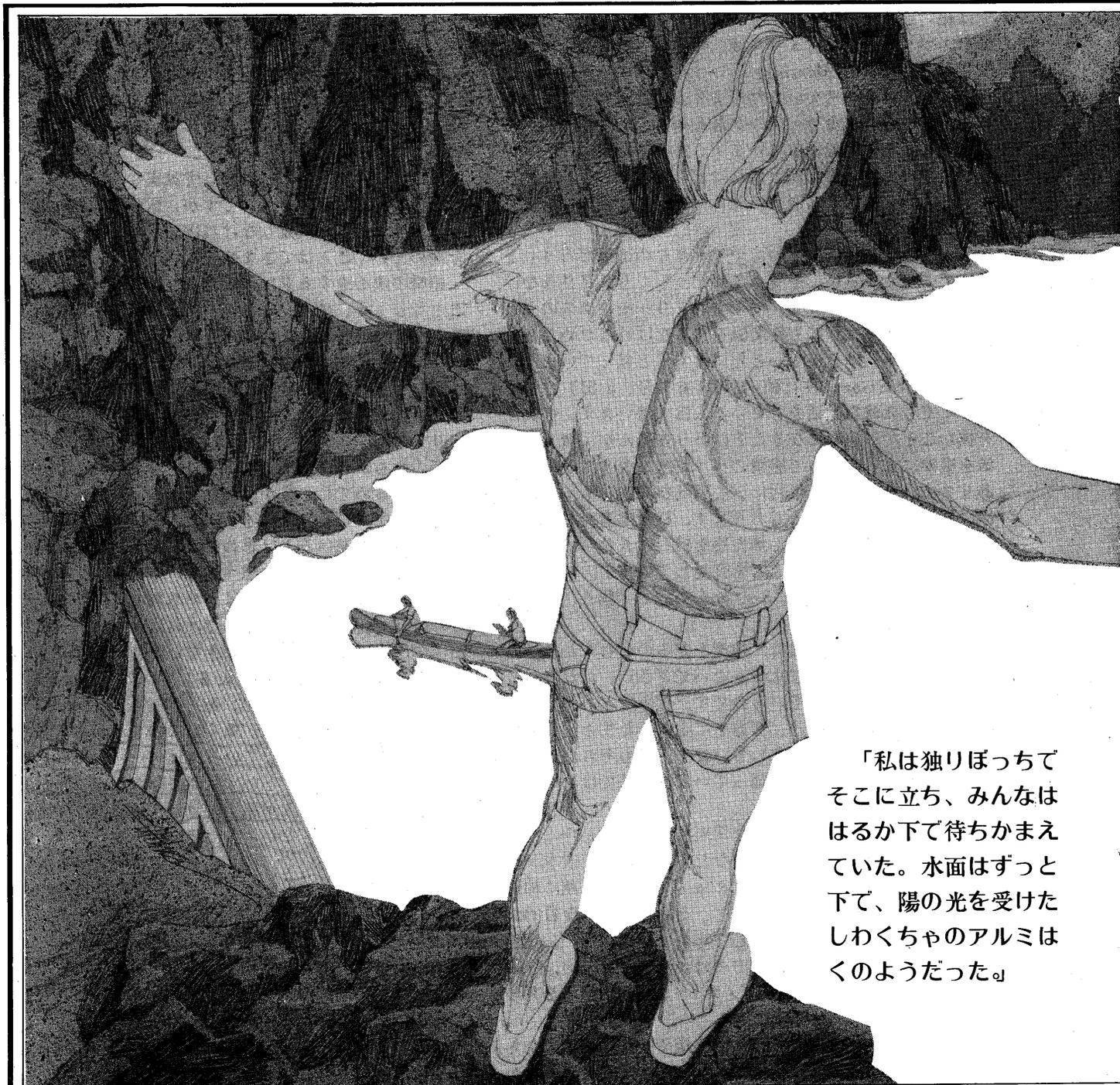
キース・メリル氏の紹介：映画製作者のメリル氏は末日聖徒であり、The Great American Cowboy「ザ・グレート・アメリカン・カウボーイ」で1975年アカデミー賞ドキュメント部門最優秀賞を獲得した。（アカデミー賞は映画関係者に贈られる米国最高の賞である）授賞にあたっては、「神を信じることを教えてくれた母と、己れを信じることを教えてくれた父と、教わったことを実行するように助けてくれた

妻に」感謝を表明した。その率直な言葉は、福音を実際に日常生活の中核に生かす彼の人生哲学そのままである。

決断はつらいのではないだろうか。私たちは5分ごとに決定に迫られていると言っても過言ではない。周囲を見まわすたびにいつも選択が待っている。あしたは何をしよう、あさっては何をしよう、どんな生活をしようか私たちは考え、決定する。決定は、自分の知

っていることと実際に行なうこととのすきまに橋をかけることなのだ。

君はこんなことを考えた経験がないだろうか。もしも親に自分の一挙一動を映画のように見られていたらどんなだろうかと。私たちの生活を映画に比較するとおもしろい。映画の製作はまさに選択そのものだからだ。「ザ・グレート・アメリカン・カウボーイ」を製作した間に4万8千メートル以上のフィルムを撮ったが、未使用のフィ



「私はひとりぼっちでそこに立ち、みんなははるか下で待ちかまえていた。水面はずっと下で、陽の光を受けたしわくちやのアルミはくのようなだった」

ルムを含めたら80時間の映画になる。完成した映画はたったの1時間半なのに。ということは、1メートル使うごとに49メートルをボツにしたわけだ。

人生もそんなものだ。たいがいの決定には50通りもの道がある。その50の中からひとつに決めて、君の選んだそのひとつが君の人生の永遠に残る記録を埋めるのだ。

君には選択する能力がある。選ぶ力がある。それが、私たちの天父が自由

意志という素晴らしい原則と一緒に私たちに与えて下さったものだ。

「こわいんだろう！」

少年の頃、私は山に近い小さな町に住んでいた。水泳場の監視員をしていて、泳いでばかりいた。

私たちはイーストキャニオンと呼ぶ美しい人造池へ泳ぎに行ったが、そこは険しいがけにはさまれた峡谷の細く

なったところに造ったダムで、私たちはそのがけによじ登って池に飛び込んだ。

何回か行って、岩やがけや水深がかなりわかったところで、2、3人が愚かな胆だめしをやり出した。ひとりがいつも飛び込んでいる場所まで登って、そこで大声で叫んだ。「おーい、もっと高い所からダイビングしてみせるからな！」

「よーし、やれえ！」

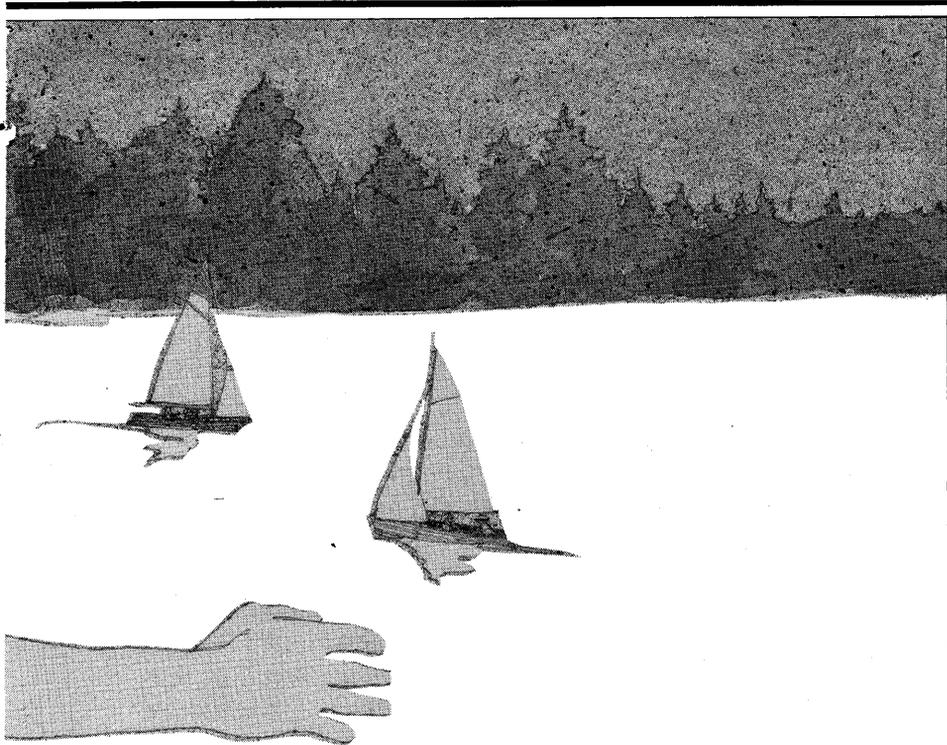
彼は水面から15メートルもあるダムのてっぺんまで登った。そして狐を描いて池に飛び込むと、私たちは羊の群れのように岩にはい上がり、次々にダムに飛び込んだ。

ところが、私の友だちがそれにあきたりず、「よーし、おれはもっと高い所からだ！」と叫んだ。そしておきのがけを18メートルほど登った。私は自分だけ取り残されるのがいやで、一緒になってがけをはい上がった。みんなは、私が彼とせりあうつもりだということを知っていた。友だちはぐっとおそれをのみ込んで、震えるひざから背すじを思いきってそらし、18メートル空中を飛んで水に消えた。私は勇気をふるって、ダイビングした。そのときまでにほかのみんなは下に降りていたが、あの友だちだけは違った。20メートルくらいの所まで登って、またダイビングの準備をした。私は下からまともに見えなかった。彼は笑い出して、肩をさすり目をこすりながら言った。「おーい、メリル、おまえできるか？」

「もちろんだ。おれだってやるぞ！」岸のみんなが、「もちろん、やるさ！」と口々に言った。

それで、私は岸に上がって岩によじ登った。私はせいぜいもう1回の勇気しかないことを自分で承知していた。もし私が20メートルのところから飛び込めば、彼はもっと高いところに登ることがわかっていたので、私は一番てっぺんまで登ろうと考えた。

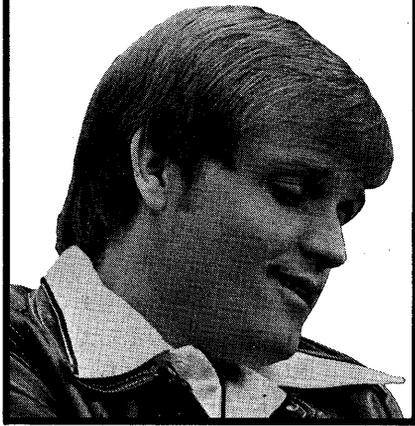
24メートルもあるがけのてっぺんまでよじ登ってまわりを見わたし、下を見おろすと、絶壁が水面からその高さまできりたって続いていた。難関はふたつ、24メートルを飛ぶことと、水底の岩にぶちあたらないように岩の間をねらうこと。みんなが、「こわいんだ



決断のとき

おはなし：キース・メリル

イラスト：エド・ホームズ



ろう、こわいだろう」とはやしたてていた。

私は独りぼっちでそこに立ち、みんなははるか下で待ちかまえていた。私はただこわかった。真剣だったが、それはしたいと思ったり正しいと思って決めたことではなかった。今は名前も忘れた6人位の仲間たちが「やーい、弱虫、できるのか？」とはやしたてたからだった。

下の岩を越えて飛び込むために助走が必要だと考えた私は、後ろに下がり、かけのふちめがけて懸命に走った。用心して岩の端につけておいた印が見つかったので、そこから宙に身を躍らせた。落下の途中で、親や教師たちから、悪くすると身を滅ぼすこともあるから決定は慎重にきなさいと教えられていたことがまざまざと思い出された。

体が水を打ったとき、私はてっきりコンクリートだと思った。24メートルの高さから飛び降りるのがどれほどのことか知らないが、私の頭は結局水に突っ込んだのだから自分は幸せな男だった。

制御するのはだれか

しかし、私はなぜ飛び込んだのだろうか。私は逆らえない状態に追い込まれた。しない方がいいとわかっているのに、その気持ちがないことに、仲間たちに期待されて圧力を受けた。そして私はその圧力に負けた。世にあって生きていた私が、そのとき自分を制御できずに世のものとなったのだ。自分が自分の

人生を決めたのではなく、世が私に決定を下したのだ。

正しい声に聞き従う

決定とはそんなものだ。自分で下すこともあればまわりの人が下すこともある。また、決定するときにはいろいろな声が入ってくる。友だち、両親、教師そのほか。私たちはある声に耳を傾けなければならないし、ある声はしりぞけなければならない。全部が良い助言ではないからだ。世にありながら世のものにならないというチャレンジを前にしたとき、自分の人生は自分が決めるのだということをはっきり覚えてほしい。もし自分の決定を世にまかせたら、自分は世のものになって、逃れる道がなくなることを覚悟しなさい。

5つの大切な決断

5つの大切な決断を上手にすれば人生はまず安心だと思う。君の人生の重要な決断、天父が気にかけておられる君の決断は、実はそんなに多くはない。あつかましくも言うのだが、5つか6つの決断を上手にすれば、君は世にありながら世のものにならないでいられると、私は思う。

君は大切だ

まず、自分は大切なのだと心に決めることだ。まだその決断をしていない人が大勢いる。大勢の人が恐れや疑惑を抱いている。君は自分に対して不安や恐れを持ちながら自分の姿を求めて悩み、人から受け入れられることを願っている。そういうことがよくない決定の背景になることがある。だから、自分は大切なのだと決断しなさい。自分を尊重できれば、24メートルのかけから飛び降りるようなことは決してしないだろう。むこうみずな賭けより自分がもっと大切なことがわかるに違いない。

サタンのひとつの大きな武器は、おまえはつまらない人間だとささやくことだ。めざす標的は、君が自分自身に対して持つイメージ。自分つまらない人間だと信じ込ませることができた

ら、サタンの仕事は半分すんだも同然だ。だから、私たちの天父が人の値は大いなるものだと言っておられることをいつも忘れてはならない。君は大いなる者だ。君たち一人一人がその人なりに、自分に良いイメージを持ちなさい。進歩しようと励ましてくれる良いイメージを持ちなさい。 太り過ぎならもっとやせた自分をイメージに描き、怠け者だったらもっと働き者の自分を心に描き、山とある問題のどれかを持っていたなら、そんな自分をそのままあきらめてはだめだ。こうなりたいと思う自分の姿をイメージとして描き出しなさい。そのようにしてそのイメージを常に追求していったら、いつかイメージ通りの人になれる。

決断は一度だけすればいい

2番目に大切な決断は、妥協すまいという決心だ。これは一番力になる決断だ。君はその決断を一度だけすればいい。

いちいち苦しみながら26,645回の決心をしないですむならその方がよいと君も思うだろう。

すこぶる簡単だ。たった一度で全部の決断をまとめてしてしまう決心をしなさい。例をあげてみよう。知恵の言葉だ。君はもう知恵の言葉を守ると決意しているだろうか。それとも、だれかにタバコをすすめられるたびに決断しているのだろうか。酒を出されるたびに決心しているのか。それとももう決意してしまったのか。一度決心すれば26,645回の決心をしなくてすむのだ。26,645回というのは君を17歳と仮定し、90歳まで生きる勘定で、毎日1回知恵の言葉を守るかどうかの決断をするとしてはじき出した数だ。実に愚かなことではないか。今すぐに決断しなさい。道徳について、知恵の言葉について、神殿結婚や伝道やそのほか福音の大切な原則全部について、この教会の標準を守ることについて妥協はしないと、今すぐに決意しなさい。

私はずっと昔に知恵の言葉について決心した。その大きな決心をする前は、すさんだりへこたれたりするたびにそれこそ何回も決心し、正しい決心ができなかった。それでやっと、「これはばからしい。今から自分は知

恵の言葉を守るんだ」と決意し、それからは妥協することが全くなかった。

「ザ・グレート・アメリカン・カウボーイ」のプレミアムショーには千人くらいの招待者があったが、教会員はほんのわずかだった。当然のこととして、「報道関係者には何を出しましょうか。劇場のロビーにバーを作って接待して、ごきげんを取らなくちゃだめですよ。カクテルの用意がちゃんとしてありますから」という声が上がった。私はそれにこう返事した。「私が主催するプレミアムショーには、カクテルはいっさい出しません」そのときの試写会は私の主催だったので、「もちろん、カクテルなしです」と言った。

私はすでにその決断をしてあった。あれこれ言う余地はなかった。何年も前にその決心はしていたから。

プレミアムショーの夜は深まり、人々が来ては中に吸い込まれて行った。妻と私は場内に入り、時間が過ぎても、人々が帰ろうとしないのを知って、胸を躍らせ、喜んだ。私たちはロビーに出て、がらんとしたロビーで物思いにふけた。ロビーにすわっているときに、玄関に入ってきた人物はだれだと思う？ マリオン・D・ハンクス長老だった。彼がどこから来たのか、招待されていたのかどうかさえ知らなかったが、現にマリオン・D・ハンクス長老が劇場にやって来た。もしもマリオン・D・ハンクス長老が歩いてくる途中にカクテルグラスの並んだバーが作ってあったら、がけから飛び込んで岩にぶつかったほどの衝撃だっただろう。

そうなんだ。妥協してはいけない。今君がしなければならないのは、たった一度で決断を下すことだ。

幾つかの目標

ほかに早く決めなければならない決心が3つある。君たち少年は今のうちに、伝道に出ようと決心しなさい。自分は例外だと思っ**て**はいけない。キンボール大管長は、特別な事情のある人を除いて、教会の青年は全員伝道に出るべきだと言われた。少女たちは、伝道に出ようという少年たちの足を引張るようなことはしないように、予言者から教えられている。彼らを励まし、

支えてあげなさい。

4番目の決断は、神殿で結婚しようと今すぐ決意することだ。ほかに道はない。選択の余地はない。今決心しなさい。

君が今週中に決心しなければならぬ5つの基本的なことの最後は何だろう。教会に活発でいることだ。たくさんの疑問が出てくる年代を君も通るだろう。こんなことがと、わけのわからない出来事にぶつかる**とき**だってあるだろう。疑問や恐れや心配**だ**って出てくるに違いない。だが、教会の活動をおろそかにしてはだめだ。どんなときにどんなことを考えても、教会には活発でいなさい。どんな圧力が**か**かっても、教会へは休まないで出席しなさい。

いざ決断したら続けること

さあ、御両親のところへ行ってこう言いなさい。「お父さん、お母さん、ぼくは人生の5つの決心をしたよ。そしてそれを守ることを天のお父様と誓ったけど、お父さんとお母さんにも約束します。

まず第一に、自分がどんなに大切かっていうことがはっきり**わ**かったんだ。ぼくは神様の子なんだ。だからそれにふさわしい生活をする**つ**て決心したの。

それからね。ぼくは妥協しない。決心しなくちゃならないときは、『これは妥協かどうか』と考えるだけ。もし妥協**だ**ったら、それはしない。

そして、伝道に出ること。(もし少女**だ**ったら)伝道に出た人と結婚します。次は神殿で結婚すること。

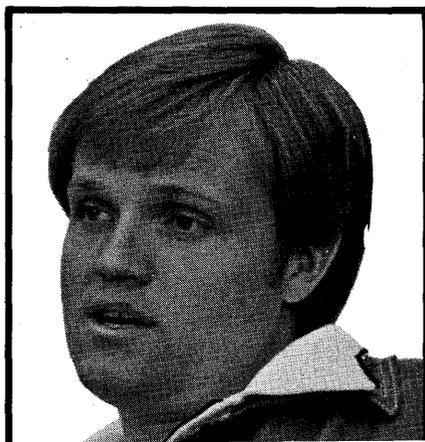
そして最後は、どんな気持のときでも、どんなに夢中になってる人がいても、出るべき集会は必ず**出**ます。」

そうしたら君の御両親は、もうほかの決断を君に望まないと保証する。なぜかといえば、君がそれらのことをすれば必ず天父のみたまを受けて、世にありながら世のものにならないという**と**てつもないチャレンジを立派にこなせると、私にはよくわかっているから**だ**。

5つの決断に従って生きるの**は**容易なことではない。飛びおりにしまえばおしまい**の**24メートルのダイビングとは違って、私が今述べた決断はそれ**で**終りというものではない。それはがけのジャンプとは違って、何度も何度も繰り返す試される決断だろう。だから、継続することが必要な**だ**。決断し、それを続けなさい。あくまでも頑張りなさい。

覚悟を決めて

「ザ・グレート・アメリカン・カウボーイ」というフィルムを撮ろうと決めたとき、私は暖かくて快適な事務所**に**すわっていて、「ロデオのカウボーイを撮るぞ」とつぶやいた。そしてそれからすぐに、私は牧場の柵に腰かけていた**の**だった。目標はもう白くきれいで美しいなど**い**ったものではなかった。柵の中を歩くだけで靴はどろんこ。目標を立てたときからそこに行きつくまでの間で、いづれ君も人生の土俵の泥にまみれるだろう。そのときこそが、ぐっとふんばるときだ。目標を変えてはいけない。「足が汚れるからこの目標はよくない」と言**っ**てはだめだ。「この目標は僕**の**力じゃ無理な**の**かもしれない」と言**っ**てはだめだ。「一生懸命やってきた。頑張り**つ**て努力してきた。朝早く起きて、真剣に勉強して、教会には前よりよく出席して、よく祈って、福音の原則に従**っ**てきたんだ」と言う**の**だ。根強く頑張りなさい。そうすれば目標に到達できてイメージに描いた通り**に**なっている自分に気がつく**こ**とだろう。



「健康に気をつけよう、 1976年健康展」

「モルモンがこんなに健康に気をつける人たちだったなんて知りませんでしたよ」

「どこに行けばモルモン経が買えますか」

「お尋ねしたいんですが、どうしたらこの教会にはいれますか」

フィリピンの教会の医療宣教師たちが企画した「健康に気をつけよう、1976年健康展」にやって来た人々は口々にこう言った。初めの2日間に、フィリピン・マニラ伝道部には訪問者から800以上の照会があった。しかしこれはほんの始まりに過ぎなかった。ルソン島全土を巡る間の訪問者は100万人を優に越すと見積もられている。

「健康展」は、11人の若い医療宣教師が、どうしたら大勢の大衆に知ってもらえるだろうかと考えた末の企画であった。政府関係者や保健所がその企画を知って後援し、20を越える関係機関が情報や人員を提供してくれた。

政府の関係者が特に熱心で、例を取れば、リサール州のユーロジオ・ロドリゲス知事は、企画を知って職員の中から特別スタッフを構成し、健康展の予告にあたらせた。また州職員に、家族ともども健康展に参加するようにと

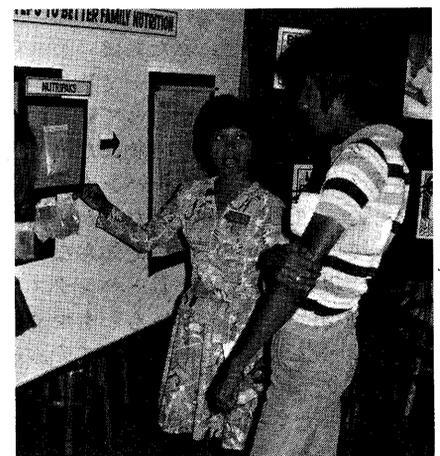
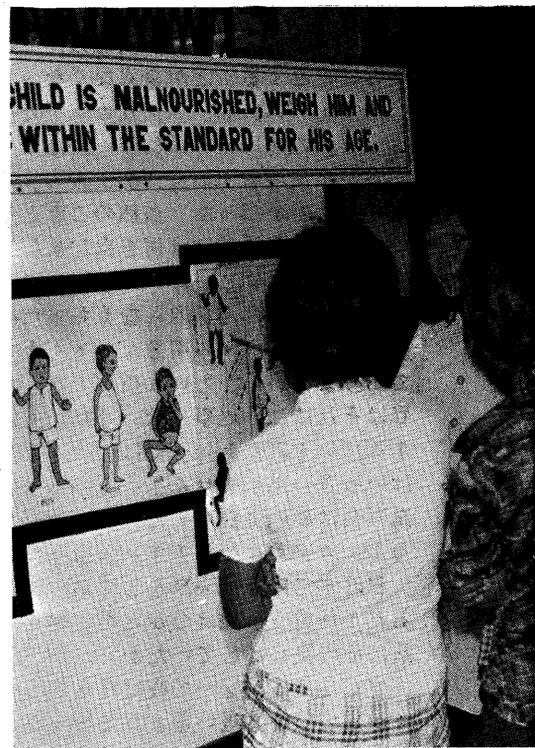
通告を出した。

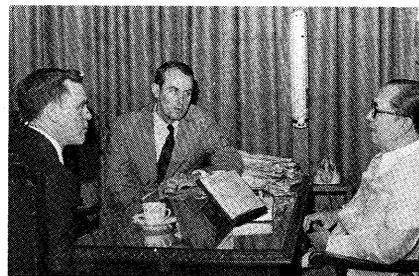
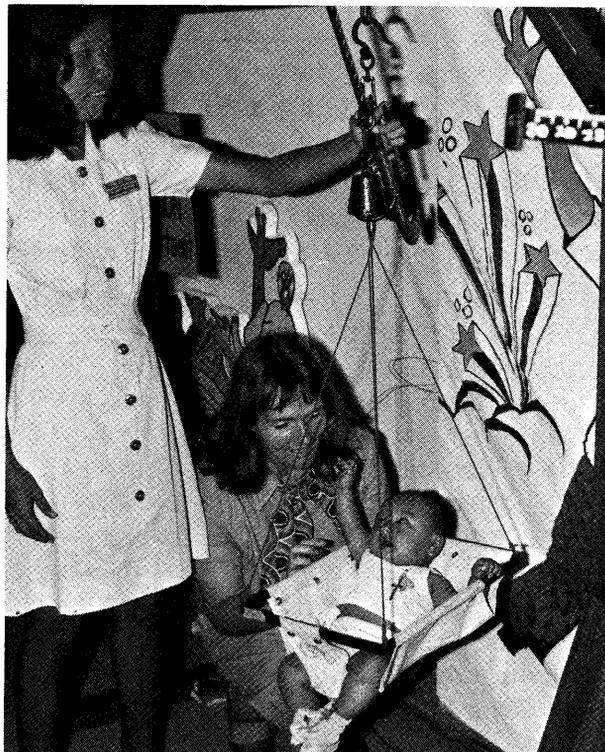
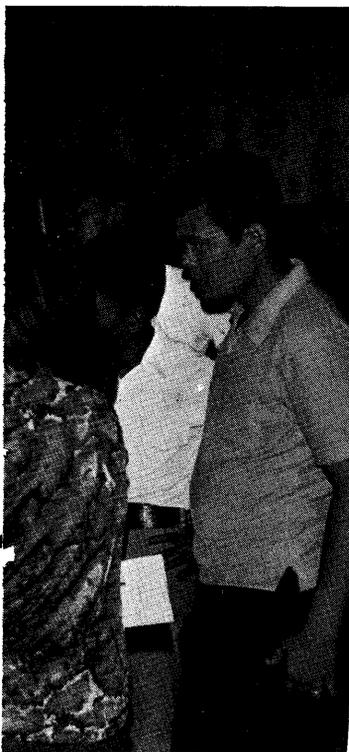
教育省長官のジュアン・マヌアル氏は、授業時間中に全校生徒を訪問させるようにという旨を学校に通知した。市町村長や何百人という役人も、マニラの各地で開かれた「健康展」を訪れた。健康展が開催される前から、幾つもの町から開催の招請があったほどである。

マニラのちょうど南にあたるカピト市では、エドアルド・ド・グスマン市長が全市をあげての「家族週間」を提唱したが、その目的は知的、肉体的、精神的な面の家族の健康増進で、呼び物は「健康に気をつけよう、1976年健康展」であった。

政府関係者に限らず、報道機関も好意的に報じた。健康展がフィリピン・マニラステーク部センターで開催された時は、推定500万人に報道されている。初日には国営テレビ局が30分の特別番組を組んで放映した。番組の中心は、教会福祉活動部門のジェームズ・メーソン、アイザック・ファーガソン両博士とのインタビューであった。その中で、メーソン博士は知恵の言葉とその起源について語った。

健康展そのものは映画、展示、ポス





ター、壁画、フィルムストリップ、実演、あやつり人形芝居などを多彩に組み合わせた内容で、フィリピン結核予防協会の移動レントゲン車が出張し、無料のレントゲン撮影と健康相談を行なった。アジア心臓病センターによる人工呼吸法の実演も行なわれた。

健康展の一部はグリーン・レボリューションの後援によるが、グリーン・レボリューションとはイメルダ・マルコスフィリピン大統領夫人主宰の、節約と食生活改善をめざして自家菜園を推進する団体である。それは当然、キンボール大管長が末日聖徒に提唱する家庭菜園の勧めと一致する。グリーン・レボリューションでは各家庭に植物の種を売ったが、多くの支部、ワード部で独自にその福祉計画を始めている。

清潔と適切な調理と公衆衛生の大切さを説く展示もあった。全国の児童の92パーセント近くが何らかの寄生虫に冒されているが、寄生虫の大半は衛生習慣によって予防できる。

その他の展示では、母親向けに栄養失調と脱水をテーマに、栄養不良かどうか子供の体重を測ってみる催しもあった。栄養不足が発見された児童は、地域の保健所と扶助協会の教師たちか

ら親に栄養指導が行なわれている。

地域の保健機関の協力の下で、数千人にコレラ、チフス、天然痘、結核、小児マヒの予防接種が行なわれた。結核その他の伝染病が発見されると、適当な治療手段が講じられた。

児童向けの講義もあり、映画や漫画やあやつり人形で健康や清潔が教えられた。

健康展はマニラステーク部センターに次いで、昨年8月の地域大会の会場、アラネタコロシウムで催された。大商店街の中心にある会場で、わずか3日間に1万5千人以上の訪問者を集めた。そして1週間に、フィリピン・マニラ伝道部には1万2千枚を越す照会カードが届くほどである。

しかしこれはほんの一步に過ぎない。健康展はマニラから別の町をまわり、避暑地バギオで3ヵ月間催されたときは、サマーカーニバルの呼び物となった。器材や展示物の枠や箱を引くトラックは、陸軍の分隊をなすフィリピン警察隊の好意によった。

教会員は複雑な展示物や色彩豊かな壁画や見事なポスターの作成に何百時間も奉仕した。健康展企画協力にあたったある人の言葉によれば、「医療宣

教師、伝道宣教師、地方部やステーク部の宣教師、それに指導者が、健康改善と福音伝道という大事業に結集しました」

「健康に気をつけよう、1976年健康展」は大勢の人々の生活にさまざまな影響を残した。これを契機に多数の人々の健康が増進し、病気は減り、寄生虫による栄養失調児が少なくなり、多くの家庭が菜園計画を実行して栄養改善と節約を行なうであろう。

1976年健康展を通じて初めて教会を知った人々は多く、現在そのうちの多数が教会員となる祝福を受け、豊かな生活を送っている。

☆

☆

教会幹部の大改組 発表さる

第146回半期総大会の初日、10月1日(金)の午前の大会で、4名の新教会幹部の任命と共に、27名に及ぶ幹部の改組が発表された。これは、88カ国に住む360万会員の間で教会プログラムをより円滑に、また効果的に運営することさらには2万5千名を越える宣教師の管理と訓練を強化し、地元指導者育成のための改宗者の増加に力を入れることを目的としたものである。

改組の骨子は以下の通りである。(詳細は次号に掲載の予定)

1. 七十人最高評議員会の改組
(新任会員は以下の通り)
フランクリン・D・リチャーズ、ジェームズ・E・ファウスト、J・トーマス・ファイアズ、A・セオドア・タトル、ニール・A・マックスウェル、マリオン・D・ハンクス、ポール・H・ダン
2. 新たに七十人最高評議員会会員として召された5名を除く他の16名の十二使徒評議員会補助は、すべて七十人第一定員会会員となる。
3. これまで七十人最高評議員会会員の召しにあった7名の長老のうち、タトル、ダン両長老を除く他の5名の長老は、七十人第一定員会会員となる。
4. 管理監督会第二副監督の任にあつ

たボーン・J・フェザーストン長老は、その職を解任されて七十人第一定員会会員となる。

5. ディーン・L・ラーセン、ロイデン・G・デリック、ロバート・E・ウェルズを、新たに七十人第一定員会会員として任命する。

6. アイダホ州出身のJ・リチャード・クラークを、フェザーストン長老の後任として管理監督会第二副監督に任命する。

以上の結果、七十人第一定員会会員は、最高評議員会の7名も含め、総勢39名となった。七十人最高評議員会および第一定員会会員で地域担当教会幹部および伝道部長の任を受けるのは以下の通りである。

地域担当：ジェームズ・E・ファウス

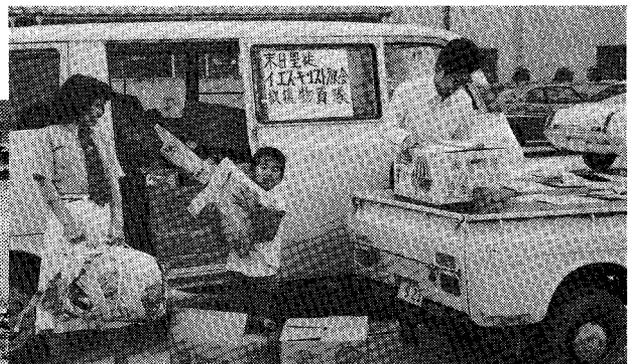
ト、A・セオドア・タトル(南米)；J・トーマス・ファイアズ(メキシコ、中米)；バーナード・P・ブロックバンク(イギリス)；ロバート・L・シンプソン(オーストラリア、ニュージーランド)；アドニー・Y・小松(日本、韓国)；ジョセフ・B・ワースリン、チャールズ・A・ディディエ(ヨーロッパ)；ジョン・H・グローバーク(南太平洋)；ジェイコブ・ディエガー(東南アジア)

伝道部長：ローレン・C・ダン(オーストラリア)；ジーン・R・クック(ウルグアイ)；ウィリアム・R・ブラッドフォード(チリ)；ジョージ・P・リー(アリゾナ)；M・ラッセル・ブラード・ジュニア(カナダ・トロント)；ボーン・J・フェザーストン(テキサス)

いち早く差し伸べられた 救援の手

一面水びたし

長良川の支流・伊自良川の出水で水
岐阜市南柿ヶ瀬地区 11日午後2時50分ごろ、本



台風17号の前ぶれ豪雨は9月8日の夜から降り続き、東海地方では年間降雨量の3分の1を記録しました。中でも岐阜市を流れる長良川堤防の決壊は岐阜南西地区に大きな被害をもたらしました。この災害を知った北陸地方部よりいち早くトラック便で救援物資が送られたのを皮切りに、三重、静岡、中部の兄弟姉妹からも続々と物資が送られ、被災者は大きな慰めと励ましを受けました。また被災地区にあたる岐阜支部、名古屋第3支部の救援活動は、兄弟姉妹や長老たちの強い愛の絆のもとに結束して行なわれ、これまで教会に関心を示さなかった人々の心を打つに至りました。被害は決して小さいものではありませんでしたが、私たちは、これを通して非常に大きな教訓を得たと確信しています。(中部地方部長 古芝健三)

記念すべき8月17日

日本名古屋伝道部

岡崎支部

貫井興治

8月17日。この日は私たち家族が、永遠の生命を得るために狭い門から細くて長い道へ第一歩を踏み入れた記念すべき日です。

当日は週日にもかかわらず、私たちのバプテスマを祝福して下さるため、4ヵ月にわたって福音を伝えて下さった宣教師のほか、遠く名古屋から来て下さった教会の指導者の方々や初めてお会いする兄弟姉妹など、本当に大勢の兄弟姉妹がかけつけて下さいました。

私たちは、すばらしいバプテスマ会に感謝と感動の涙を流しながら、次のように証しました。

私(40歳)の証；

天のお父様、今私たち家族はバプテスマを受けることができました。いいえ、受けさせて頂くことができましたことを深く感謝いたします。

それから、わざわざ私たち家族のために時間をさいて下さいました兄弟姉妹の皆さん——今日からは兄弟姉妹の皆さんと呼ばせて頂きます——本当にすばらしいバプテスマ会をありがとうございます。

私たち家族は、この会場に暖かい愛が、そして祝福が満ち満ちていることを強く感じております。こうして、皆さんの兄弟姉妹としてお会いするまでに、宣教師から多くの福音を聞き、本当に多くの愛を受けてきましたことを証いたします。

5月初旬の昼下り、ふたりの宣教師が家を訪ねて下さったのが、モルモンに接する最初の機会でした。

正直に言って、神様を信じる気持ちなど微塵も持ち合せておりませんでした。大学生宣教師の話聞くのも悪くないだろうという位の気持ちでした。しかし、そんな私たちの心を捉えたものがありました。それは、何よりも宣教師が家族に対して、心から接して下さることでした。4ヵ月の間レッスンを受けたどの宣教師も誠心誠意接して下さいました。

週に1回聞く福音の一つ一つが、私たちには新しいことばかりで、まるで新しい海绵が水を吸い込んでふくらんでいくような気持ちで聞き入りました。

しかし、細くて長い道に通じる門へ至るまでには、多くの難関がありました。

最初の難関は、レッスンの初めと終りにするお祈りでした。神を信じることのできなかつた私は、自ら祈ることはどうしてもできず、宣教師のお祈りを聞いているだけでした。

レッスンを始めて2ヵ月以上たった日も、宣教師と私との間で「私たちは貫井家族を愛しております。貫井家族は、私たちを信頼して下さいますか。」

「はい。信頼しております。」

「どの位、信頼していただけますか。」

「99%信頼しています。」

「本当に、私たちを信頼して下さいるならば、お祈りをして下さい。お祈りをしないと神様は何も答えてくれませんか」と、こんなやりとりが続いておりました。たとえ百歩譲って神様の存在を認めたとしても、宣教師の前で声を出して祈らなくても、神様には心で通じるものと思っておりましたので、祈るという形に捉われることが無意味のように思われて仕方がなかったのです。

しかし、レッスンを続けて受けるためには宣教師の誠意に応えなくてはならないということを感じておりましたので、それには宣教師の前で祈ることしかないと、妻も祈ることを勧めました。

ある日、宣教師の言葉に素直に応じてお祈りの言葉を述べました。簡単なお祈りでしたが、初めてのお祈りに宣教師の目には喜びの涙が見えました。不思議なことに、私の気持ちもすっきりしました。

こうして、私たちのレッスンはやっと軌道にのって進みましたが、もう少しで終わるといところで、大きな、とても大きな難関にぶつかりました。それは戒めのひとつ、「什分の一」でした。

近い将来、両親を呼び寄せるために家を増築したばかりで、家計はとても苦しく、また少しでも余裕があれば、両親の田舎での生活を多少なりとも援助してやりたいと考えておりましたので、とてもこの律法を守ることはできない、とはっきり申し上げました。

4ヵ月間、熱心にレッスンをして下さいる宣教師と別れることは、とてもつらいことでしたが、他に方法はありませんでした。

2日後、宣教師から「さようなら。愛する貫井家族の皆さん、心から神様の祝福をお祈り致しております。私が少

しても良い宣教師として、本当の意味で神様の宣教師としてお話していたら、と反省しています。私のような者からお話を聞いて下さりまして感謝しています。何度お礼を申し上げても、足りない位です…」という涙でにじんだ手紙を受け取り、私の方こそ本当に申しわけないことをした、と涙を落とさずに読むことはできませんでした。これにくじけずに、頑張してほしいと心に念じるだけでした。

ところが、その3日後、宣教師から「もう一度会っていただけませんか」という電話がありました。私には、その電話が干からびた田に引き入れられた恵みの水のように感じ取れました。

約束の日に見えた最初からの宣教師のひとは、私たち家族のために3日間断食をして神に祈り続けたとのことで、やせた頬が一層こけて見えました。

そして、彼らから「名古屋の伝道部長に相談したところ、問題を解決する方法がありました。本当に困ったときには支部長に相談して下さい。変な自尊心は捨てて、謙虚な気持ちで受けとめて下さい」と、心からの強い説得がありました。

私たちは、教会から援助を受けることなどは到底できない、と主張しましたが、宣教師の誠意のある説明をよく理解することができましたので、その誠意に応えることに決心しました。

「少しのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのか。新しい粉のかたまりになるために、古いパン種をとり除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから」と聖書に記されております。

私はもう40歳です。古いパン種によって大きくふくらみかけておりました。そのふくらみかけたパンの中から、古いパン種をとり除き新しいパンの粉に戻すことは、神の業としか思えませんでした。宣教師の偉大な力がそれをなしたのです。

このように、宣教師の暖かい愛に恵まれて、今日皆さんの兄弟姉妹になることができました。

それから今日、私たち家族にとってとても素晴らしい祝福がありました。あるいは第三の難関が解決できたと申し上げた方がよいかも知れません。

妻は、事情があって他の宗教の信者になっておりましたが、布教員の方には、モルモン教に改宗することを全く話していなかったもので、大層気にしておりました。

今日、たまたまその布教員が家に見えまして「奥さんはどうかされましたか」と尋ねられました。

私は、モルモン教について宣教師からレッスンを受けたこと、モルモン教は家庭を大切に、福音の律法と儀式とを守ることによって、永遠の生命を得ることができること、また今日バプテスマを受けることなどを話しました。

すると意外にも「家族の皆さんが、同じ宗教を信じることはとても良いことです。厳しい律法ですが、それを守ることができれば素晴らしいことだと思います。どうか頑張って下さい」と言って下さいました。この思いがけない激励は、大きな祝福でなくて何でしょうか。

私たちは、本当に多くの兄弟姉妹の力添えによりバプテスマを受けることができた心から感謝しております。

これからは、細くて長い道を多くの兄弟姉妹と共に、自分たちだけの足で真直ぐに進もうという強い確信を持つことができましたことをここに証いたします。

妻（34歳）の証；

兄弟姉妹の皆さん、私たち家族は、今とても幸せで一杯です。大勢の兄弟姉妹にお集まり頂き、このように素晴らしいバプテスマ会を開いて下さりまして、心から感謝申し上げます。

ただいま主人が申しましたように、私たち家族は、宣教師を初め多くの兄弟姉妹の大きなお力添えによって、このように生まれ変わりました。私は、宣教師さんを初め、伝道部長さん、副伝道部長さん、支部長さん、それに兄弟姉妹の皆さんが立派な方々ばかりであり、このことを通して、モルモンの教えが本当に素晴らしい福音でありますことを心から証いたします。

長男（8歳）の証；

ぼくが、なぜバプテスマを受けたかという、ぼくのお父さんや、お母さんや、妹の陽子とぼくの家族みんなが、いつまでも幸せにくらせるようにバプテスマを受けました。

以上の通り、3人がそれぞれイエス・キリストのみ名を通して証しました。

永遠の生命を得る道に通じる門まで、一条の光となって私たち家族を案内して下さいました宣教師の上に大きな祝福がありますようお祈りします。

最後に、私たち家族の証を記す機会を与えられましたことを感謝いたします。アーメン。





私の心を変えた神の教え

日本横浜ステーク部

横浜第一ワード部 鈴木正則

現在の私には、学業、教会の責任、聖典の勉強と、なすべきことがたくさんあります。私には、思ったように事が運ばなかったり、肉体的にも疲れ切ってしまう、何もかも投げ出したい気持ちにまで追い込まれたりしたときでも、私の心を慰め、勇気づけてくれるひとつの指導者の言葉があります。

「今一度、あなたがきょうまで歩んでこられた道のりを振り返ってみてください。あなたは、神様があなたを導きたもうたことがおわかりになるでしょう」

確かにその通りだと思います。私が宣教師に出会い、教会に導かれたのは、決して偶然ではありませんでした。神様が私を導いて下さったことを証いたします。

私はとても高慢な少年でした。小学校、中学校と比較的勉強の良くできる子として育った私は、知らず知らずのうちに、知識や自分に寄せられる信望を自慢するようになっていました。反抗期を迎え、私の高慢さは、ますますエスカレートしていきました。「それどころじゃないよ。ぼくは勉強しなけりゃならないんだ！」不満のはけ口は、いつも母でした。私は、両親の愛情というものをすっかり忘れていたのです。そんな私に神様は怒りを示されました。

高校2年の秋でした。私は体育の時間中に柔道で相手の不注意からけがをしてしまいました。診察の結果、入院を命じられ、何よりも勉強を唱えていた私は、目前の期末試験をすべて断念することを余儀なくされました。日ごろ腎臓病からくる高血圧で悩まされていた母ですが、このような息子を精一杯慰め、朝から晩まで看病してくれました。そして入院して5日目に、決して忘れることのできない悲しい日を迎えたのです。

その日も母は朝早くから病室に来てくれました。入院してから、いろいろと母と話す機会が多かったのですが、特にその日は母が一方的に、母の生い立ちや、父との結婚、苦勞したことなどを話してくれました。もちろん、このように母とふたりだけで長く話し合ったことは一度もありませんでした。そしてその晩は付き添いとして泊ってくれることになり、母はたまたま空いていた隣のベッドで眠りました。

9月18日午前3時頃でした。母は突然、私に叫んだのです。「ああっ寒い、まっ暗、目が見えない！」やがて母は死を感じとって、「さようなら、さようなら」と何度も繰り返し、意識不明に陥りました。高血圧からの脳出血でした。無力な私は、生まれて初めて、心からの祈りを捧げました。「どうか、母を助けて下さい。神様、

お願いします。」しかし神様は私の願いには答えて下さいませんでした。

「母は命を捧げて、息子のために尽くしてくれた。なのに私は母に何をしたのか。何度、母に罵声を浴びせたことだろう。母は死んでしまったのだ。私はどうやって母に償いをすればいいのだろう。」激しい後悔の念が私を苦しめました。私はあまりのショックで葬儀にも出席できませんでした。

1ヵ月後、復学した私を級友たちは温かく迎え入れ、励ましてくれました。私は、級友たちの愛情をいつも強く感じることができました。そして、この頃からなぜか私は「人が変わった」と言われるようになりました。受験戦争、三無主義の嵐が吹き荒れる中で、どういうわけか私は、空席のホーム・ルーム委員長を買って出て、良き協力者の助けを得て、毎週、スポーツ活動の企画、運営に精を出していました。

一浪してやっと入学した大学は、私の描いていた理想像とはまるで違っていました。貴重な青春時代を犠牲にしてまでも、受験勉強をしてきた私にとって、現実にはあまりにも失望させるものばかりでした。何をしても満足の得られない空虚な毎日を送っていました。そして1年生の秋も終わる頃、私はあるひとつの経験をしました。そのことで、私は再び変わったのです。

宣教師に声をかけられた私は、素直にレッスンの約束をすることができました。福音にはあまり興味を示さなかった私に、宣教師は熱心に教えてくれました。意地悪な質問にも態度を変えず、穏やかに、笑いを浮かべて答えてくれる宣教師を見ていて、しかも、無償で2年間、すべてを捧げて働いていることを聞いて、私は自分の高慢な態度に気がつきました。モルモン経を読むたびに、一字一句が私の高慢な心に迫ってくるように感じました。受け身で聞いていた私は、次第に「どうか教えてください」という願いを持ってレッスンに臨むようになっていきました。そして1974年12月6日、多くの兄弟姉妹に祝福されてバプテスマを受けることができました。証の第一声は「私はみなさんが他人のように思えません。本当の兄弟のようです」だったそうです。

「人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(II ニーファイ2:25) 救い主は、私たちに道を備えられました。人がどのように生きるべきかを教えられました。私は証いたします。私たちが宣教師に会ったのは決して偶然ではなく、神様の導きであったことを。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

